

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育委員会（以下「県教委」）では、国土交通省関東地方整備局荒川上流河川事務所（以下「荒川上流河川事務所」）が入間川流域で行う治水事業に係る埋蔵文化財の保護について、平成15年度より協議を重ね、調整を図ってきた。

治水事業は築堤整備事業が中心で、堤防の高さを上げ、幅を広くし、現在の堤防を強化するものである。この築堤強化箇所とそれに使用する土を掘削する箇所が協議の対象となった。

周知の埋蔵文化財包蔵地となっていない箇所についても、試掘による確認調査を実施し、遺構の有無を確認しながら調整を行った。

本報告書にかかる箇所については、工事計画に先立ち荒川上流河川事務所長より、平成19年3月22日付け荒上調第69号で埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、県教委教育長あての照会文があった。

生涯学習文化財課では、平成19年12月5日～6日、平成20年6月9日～12日に遺跡所在及び範囲等確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成20年6月25日付け教生文第754-1号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

事業予定地内には、次の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称(No)	種別	時代	所在地	員数
三竹遺跡 (No.37-027)	集落跡・ 古墳跡・ その他	縄文 古墳 江戸	比企郡川島町 大字出丸中郷 字三竹316他	1

2 法手続

工事予定地内には（途中略）上記の埋蔵文化財

包蔵地が所在しますので、工事を行う場合は、工事着手前に文化財保護法第94条の規程による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別図「発掘調査を要する区域」について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

（以下略）

その取扱いについて協議を重ねたが、水害のない安全な地域づくりのために、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。

また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」）が受託することになった。

文化財保護法第94条による埋蔵文化財発掘通知が荒川上流河川事務所長から提出され、同条2項の規程により、記録保存のための発掘調査を実施するよう県教委教育長から平成20年12月4日付け教生文第4-830号で勧告した。

その後、事業団理事長から文化財保護法第92条の規程による発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

発掘調査届に対する指示通知は次のとおりである。

- ・ 1次調査
平成21年12月24日付け教生文第2-67号
- ・ 2次調査
平成22年4月21日付け教生文第2-10号
(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

三竹遺跡は、平成21年度から22年度にかけて、2次にわたる発掘調査が実施された。第1次調査は、平成22年1月4日から平成22年3月31日まで実施された。調査面積は1,927㎡である。

1月初旬に発掘事務所を設置し、重機による表土の掘削を開始し、第2次調査分を含めて実施した。1月中旬から人力による遺構の確認作業に入り、1月下旬に基準点測量を実施した。確認された遺構については順次精査を行い、土層断面図、平面図等の図面を作成し、遺構の写真撮影を行った。また、3月中旬にセスナ機による遺跡の空中写真撮影を行った。

第2次調査は、平成22年4月1日から平成22年5月31日まで実施した。調査面積は1,681㎡である。平成21年度中に第2次調査対象範囲の表土掘削と基準点測量が終了していたため、4月上旬から人力による遺構確認作業を開始した。4月中旬から検出された遺構の精査を行い、土層断面図、平面図等の図面を作成した。5月上旬に空中写真撮影を行った後、5月中旬から重機による埋め戻し作業を行った。5月下旬に機材の撤去、発掘事務所のおよび事務所周地の復旧を行い、全ての作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理報告書作成作業は、平成23年4月8日から、平成23年8月31日まで実施した。

4月から出土遺物の水洗・注記を行った後、5

月から接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺構から順次土器破片を抽出し、拓本・実測作業を開始した。遺物は機械実測（3スペース、オルソイメージャーなど）を利用して、素描や写真から実測図を完成させた。拓本が終了した遺物から、順次断面図を作成した。

遺構図の作製は、遺物の作業と並行して行った。図面整理と修正を経て第二原図を作成した。第二原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ後に、画像ソフトを用いて遺構図のトレース・土層説明等のデータを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

6月からは、断面トレースを行った後に遺物実測図のトレースを行った。トレースが完了した遺物から、遺構ごとに遺物図版組みを開始し、7月末にこの作業を終了した。

7月上旬から遺構・遺物図版の割り付けと原稿執筆に着手した。また、遺物写真撮影を行った後に、遺構写真を選択し、写真図版の割り付けに着手し、コンピューター内で編集を行った。

8月下旬に原稿執筆を終え、編集作業を行った。また、遺物や図面・写真等の記録類を整理・分類し、収納作業を行った。

3回の校正を経て、平成23年10月下旬に報告書を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、8月末に整理・分類の上、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成21年度（発掘調査）

理事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 本 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調査監兼調査第一課長	金 子 直 行
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	山 本 禎
		主 査	大 谷 徹
		主 査	渡 辺 清 志

平成22年度（発掘調査）

理事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 本 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	調査第二課長	細 田 勝
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	木 戸 春 夫

平成23年度（報告書作成）

理事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	劍 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	主幹兼整理第一課長	細 田 勝
総 務 課 長	矢 島 将 和	主 査	大 屋 道 則

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

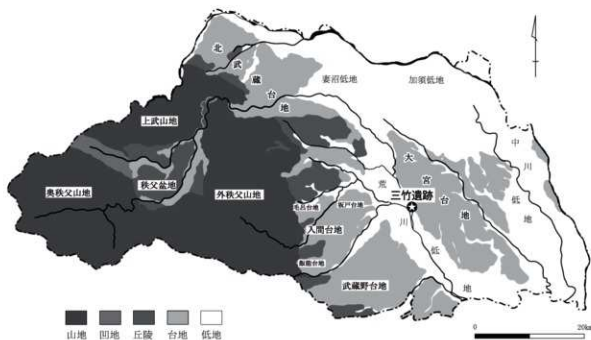
三竹遺跡は、旧入間川と荒川の合流点にほど近い、川島町南端の出丸中郷字横塚365番地に所在する。川島町は埼玉県のほぼ中央部に位置しており、周囲には西に越辺川や都幾川、東に荒川、北に市野川、南に入間川などが、町を囲むように流れ、これらの河川に挟まれて、南北に細長い地形を呈している。この地域の生活が常に洪水などの危険と隣り合わせであったことは、複雑に蛇行していた旧河川の流路跡が、残筋も残されていることから容易に想像できる。

第2図に示したように、川島町には町内を蛇行しながら、南北に貫通するように流れていた旧河道が存在し、周囲には自然堤防が発達していることがわかる。「川島町史」(川島町 2006)によると、荒川ないしは利根川が形成したと考えられる自然堤防は、形成順に古期・中期・新期の3時期

に区分されている。最も明瞭に残されている新期自然堤防に沿って、西側には自然堤防が確認されているが、これら古期や中期の自然堤防は新期自然堤防と重なり合う箇所もあり、新期自然堤防の形成によって、壊されたり埋没している部分もある。自然堤防は、縄文時代から現代に至るまで人々の生活の舞台となっていたことが、発掘調査の成果によって次第に明らかとなってきた。

この荒川低地帯にはかつて利根川が流れており、東京湾にそそいでいた。当時、荒川は利根川の支流であったが、利根川や荒川がいつ頃から流路を変えていったのか、定かではない。

荒川低地帯の自然堤防上には、古墳時代前期頃に大規模集落が激増する。恐らく後背湿地を水田として利用したと考えられるが、河川流路の変遷と環境の変化が要因の一つと考えられる。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

三竹遺跡の調査では、縄文時代、古墳時代、中・近世の遺構・遺物が発見されている。ここでは周辺地域の遺跡分布を追いかけながら、遺跡を取り巻く歴史的環境の変遷を辿ることとしよう。

縄文時代から弥生時代

自然堤防上には今のところ旧石器時代の遺構・遺物は発見されておらず、人々がこの地を利用し始めたのは縄文時代以降のことと考えられる。

縄文時代早期末葉から前期前半にかけて、荒川低地帯は中川低地とともに、縄文海進の影響が顕著だった地域である。荒川低地帯に侵入した海は、別名奥東京湾西の入江とも呼ばれ、東の入江である中川低地に広がる海とともに、半島状に突き出した館林大宮台地を囲む内湾のような景観だったと考えられている。このことは、下総台地の西縁、武蔵野台地東縁や大宮台地の西縁部に残された多くの貝塚遺跡の存在からも明らかである。武蔵野台地側では、早期末に富士見市打越貝塚が形成されていた。この当時の海は利根川により形成された深い谷に沿って広がっていったと考えられる。前期前半の圓山式から黒浜式期には海面はさらに上昇していったことが打越貝塚をはじめ、黒貝戸貝塚や、宮脇貝塚、御庵貝塚や川越市寺尾貝塚、小仙波貝塚など数多くの貝塚の存在によって明らかである。

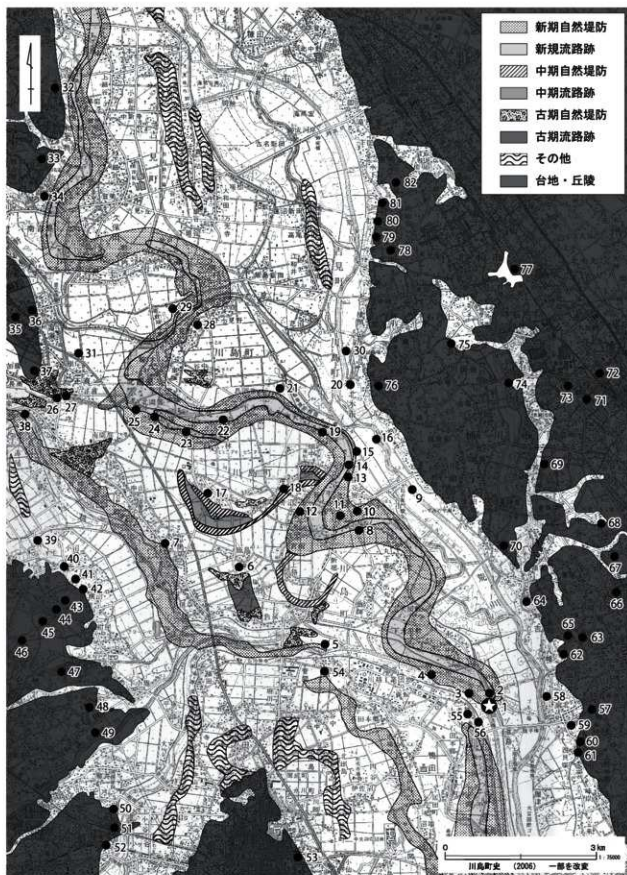
大宮台地の西縁部では、早期末頃の貝塚として、さいたま市琵琶島貝塚や上尾市平方貝塚が知られている。平方貝塚 (No.59) は対岸の打越貝塚とともに東海地方との関係を持つ打越式土器が出土した遺跡であるが、小規模な地点貝塚であつたらしい。前期前半の圓山式期には、荒川低地に注ぐ江川の左岸に後山遺跡 (No.69) が形成された。

さらに上流の柳川市谷津貝塚 (No.75) も、恐らくこの時期頃の遺跡であろう。荒川に注ぐ江川は、当時、深い谷であったと想定されるが、荒川との合流点から上流域に貝塚は発見されておらず、本

流筋よりも江川の谷筋が貝の採集に適した環境だったのだろう。恐らくこの辺りに縄文海進に伴う海岸線が形成されていたと推定される。三竹遺跡 (No.1) では縄文時代早期や前期の遺物は発見されていないが、近接した入間川の河末遺跡 (No.3, 4, 5) からは、縄文時代早期をはじめとして、前期の圓山式から黒浜式土器、さらには十三菩提式土器などが採集されている。恐らく縄文海進時には、三竹遺跡付近は海岸に極めて近い環境だったと推定される。

利根川・荒川谷を挟んだ大宮台地、武蔵野両台地の縁辺部には、縄文時代前期前半以降も数多くの遺跡が形成された。上尾市在家遺跡 (No.65) では、縄文時代前期末諸磯 c 式期の竪穴建物が発見されている。周辺ではさいたま市西大宮バイパス遺跡でも前期終末期の遺物が出土しているが、概して台地上では遺構が発見される事例は極めて少なく、長期間生活を営んだ痕跡をみいだすことが難しい。これに反し、近年の調査により、荒川低地帯の自然堤防上からは、特に縄文時代前期終末期の遺跡が相次いで調査され、豊富な内容が明らかとなった。川島町芝沼堤外遺跡 (No.30) からは、縄文時代前期後半から終末にかけての土壌や遺物が発見された。その下流に位置する東野遺跡 (No.16) では、縄文時代前期終末期の十三菩提式期の住居をはじめ土壌や集石土壌などが発見され、豊富な遺物が出土した。分布調査により、河川敷からはこの時期の遺物が多く発見されており、周辺には数多くの遺跡が埋没しているものと考えられる。あたかも台地上で遺跡が少ない時期には、自然堤防上に遺跡が形成されていたかの観がある。

縄文中期頃になると、台地上では大規模な環状集落が形成されるようになってくる。この時期の遺跡として、大宮台地では、桶川市高井遺跡 (No.72・高井北遺跡 (No.71) がある。近年調査された諏訪原遺跡 (No.74) とは、江川の谷を挟んで対向



第2図 周辺の遺跡

する位置関係にあり、この地域を代表する環状集落と言えるだろう。このほかに伊奈町原遺跡、北遺跡、上尾市秋交山遺跡、さいたま市下加遺跡などが中期の大規模集落と考えられる。武蔵野台地側では、坂戸市景台遺跡 (No47)、富士見市亀井遺跡が中期の大規模な集落遺跡として知られている。これら大規模集落の分布をみると、台地を開析する支台ごとに1つの環状ないしは双環状集落が形成され、その周辺に小規模な集落が散在し、集落には領域が存在したかのような印象がある。

自然堤防上に立地する平沼一丁田遺跡 (No17) では、勝坂式終末期の集土土壌や加曽利EⅠ式期の土壌が発見された。白井沼遺跡 (No18) でも加曽利EⅠ式期の土壌が発見されている。三竹遺跡からも勝坂式終末から加曽利EⅢ式土器が出土しており、加曽利EⅢ式土器は、荒川低地帯の遺跡では初の出土例で、周辺には遺構の存在も想定される。中期中頃から後半の時期に、自然堤防を含めた低地帯が生業活動の場として利用されており、台地上に形成された集落の盛衰と密接にかかわっていた可能性は高い。

台地上の遺跡では、縄文時代中期後半頃に大規模な環状集落が解体し、小規模な集落に分散するようになってくる。上尾市小林遺跡 (No63) にそのような姿を認めるのである。三竹遺跡では、中期末から後期初頭までの遺物は全く出土していない。周辺の自然堤防上の遺跡でも、この時期の遺物は欠落しているようである。自然堤防上では、堂地遺跡 (No7)、富田後遺跡 (No12)、元宮遺跡 (No13) のように、堀之内Ⅰ式からⅡ式前半頃の土壌が発見され、村並遺跡 (No19) からも後期前半の遺物が出土していることから、後期前半から中葉頃、一帯が再び生業活動の場となっていたことは明らかである。三竹遺跡で確認された土層の堆積状況を見ると、縄文中期後半から堀之内Ⅰ式期の間には、河川が運んだ土壌が厚く堆積していることから、低地や自然堤防が利用しにくい環

境だった可能性は高い。

縄文時代後期後半から晩明期の遺跡には、北本市宮岡氷川神社遺跡 (No79)、桶川市高井東遺跡 (No73)、後谷遺跡、吉見町三ノ耕地遺跡 (No34) 等がある。後谷遺跡や三ノ耕地遺跡からは木製品などが発見されており、湧水を利用した遺構などが存在している。台地上では縄文晩明期の遺跡数は少なく、弥生時代に至ってはほとんどその姿を認められない。あるいはこの時期の遺跡が低地帯に埋没している可能性もあろう。

古墳時代

古墳時代に入ると、遺跡数の増加はまさに爆発的ともいえる状況である。特に東松山市では高坂地区の台地上から都幾川の自然堤防上に、川島町では新期自然堤防とされる部分に、そしてさいたま市の久保領家片町遺跡の位置する台地縁辺部から、外東遺跡、五関中島遺跡などの位置する自然堤防上にかけての一帯に、古墳時代初期の遺跡が濃密に分布している。

東松山市高坂地区では、反町遺跡や城敷・銭塚遺跡などの大規模な遺跡が調査された。その結果都幾川の自然堤防上には、堰などの水利施設を備えた大規模な集落が形成されていたことが明らかとなった。また、反町遺跡では水晶や緑色凝灰岩を用いた玉作り工房も発見されている。一方、首都圏中央連絡自動車道 (圏央道) の建設に伴って調査された川島地区では、白井沼遺跡や富田後遺跡などのように、方形周溝墓や数多くの周溝状遺構、掘立柱建物跡や井戸跡などを伴う遺跡が調査されている。また反町遺跡に加え、桶川市前原遺跡でも水晶や緑色凝灰岩を素材とした勾玉や管玉の工房跡が発見された。川島町では正直玉作遺跡 (No27) が玉作り工房の可能性が高い遺跡として知られてきたが、近年この地域一帯には多くの玉作り遺跡が存在することが明らかとなり、製品が何処に供給されたのか、その探求が急務となった。

反町遺跡や白井沼遺跡、富田後遺跡からは、駿

河湾沿岸地域に分布する大塚式土器が出土している。また荒川や利根川流域では、低地帯の調査が進むとともに、古墳時代前期の遺跡から大塚式の搬入品や模倣品の事例が増えてきた(栗岡 2011)ことは注目に値する。恐らく、入間川・都幾川を遡り東松山方面に、元荒川・綾瀬川を遡り県北方面へともたらされたのであろう。古墳時代前期頃に、自然堤防上を含め周囲に広がる後背湿地を水田として利用するため、東海地方からの技術を導入した開発が本格的に始まったことを示すのであろうか。このような開発が行われたとすれば、利根川や荒川の流路が変わったため、低地一帯が人間の手を加えることで利用可能な環境に変化したことが大きいのではないだろうか。これを裏付けるように、利根川や荒川が流れた中川低地は、近世頃までは、沼地や湿地が広がっていたと考えられるのである。

反町遺跡では、古墳時代前期に大規模な集落が形成された後、古墳時代中ごろから後半にかけて、集落は墓域として利用されるようになり、数多く

の古墳が築造されたことが明らかとなった。

三竹遺跡の調査では、自然堤防上から後期に属する5基の古墳跡が検出された。遺跡分布図からは、周囲の新期自然堤防上に、廣徳寺古墳(Na10)や養老院内古墳(Na11)、愛宕塚古墳(Na14)、富士浅間塚古墳(Na15)などの古墳が存在している。また、三竹遺跡に隣接する白山古墳(Na2)は前方後円墳と推定されている。これら古墳の築造年代等には不明な点が多いものの、低地帯の開発と深い関連があったことは確実であろう。一方、大宮台地には桶川市熊野神社古墳(Na70)、上尾市殿山古墳(Na64)が、武蔵野台地側では、東松山市古凍古墳群(Na37)、牛塚山古墳群(Na40)、川越市天王山古墳群(Na48)、下小坂古墳群(Na49)など多くの古墳が築造されている。これらとの関係も今後明らかにすべき点である。

古墳時代以降も自然堤防上には古代から中世にかけての遺跡が数多く残されている。その後、江戸時代に荒川の西遷事業なども行われ、後背湿地は水田として整備され現在に至っている。

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在	主な時期	備考
1	三竹	川島	縄中、古墳後、中・近	
2	白山古墳	*	古墳後	
3	入間川河床D	*	縄早・前(関・黒・諸)	
4	入間川河床G	*	縄前(関・黒・諸)・中・後	
5	入間川河床A	*	古墳?	塚?
6	森谷稲荷古墳	*	古墳後?	塚?
7	空地	*	縄後、古墳前・後、奈・平、中	
8	廣徳寺	*	古墳前	
9	荒川河床太郎右衛門橋付近	*	縄前(末)・中	
10	廣徳寺古墳	*	古墳後	
11	養老院内古墳	*	古墳	前期集落あり?
12	富田後	*	縄後、古墳前・後、中・近	
13	元宿	*	縄後、古墳前、中・近	
14	愛宕塚古墳	*	古墳後	
15	富士浅間塚古墳	*	古墳後	
16	東野	*	縄前(末)	
17	平沼一丁田	*	縄後	
18	白井沼	*	縄中・後、古墳前	
19	村並	*	縄前・中・後、弥中・後、古墳前・後	
20	荒川河床市野川合流	*	奈・平	
		*	縄前・中	

21	大塚古墳	※	古墳後	前期集落あり?
22	上八ツ林古墳	※	古墳	
23	極楽寺	※	古墳前・後、奈・平、中	
24	西見寺	※	奈・平	
25	吹塚古墳	※	古墳後	
26	山王塚古墳	※		
27	正直玉作	※	古墳前	
28	稲荷塚古墳	※	古墳後	
29	安楽寺	※	古墳前	
30	芝沼堤外	※	縄前	
31	正直稲荷町	※	古墳	
32	御所	吉見	奈良、平安	
33	山の根古墳	※	古墳前	
34	三ノ耕地	※	縄後・晩、古墳前	
35	下道添	東松山	弥生、古墳	
36	古凍根厚葉	※	弥生、古墳	
37	古凍古墳群	※	古墳	
38	経塚	※	古墳	
39	南島	坂戸	弥生	
40	牛塚山古墳群	※	古墳	
41	小沼堀之内	※	奈良	
42	木曾免	※	旧、縄前、弥中、古墳前、奈、中・近	
43	北谷	※	縄早、古墳前、近	
44	番匠	※	旧、縄早・前、平、中・近	
45	横沼新田	※	平・近	
46	御新田	※	旧、縄早・前・中・後、近	
47	景台	※	縄中	
48	天王山古墳群	川越	古墳	
49	下小坂古墳群	※	古墳	
50	会下	※	古墳、中	
51	浅間下	※	古墳、平	
52	川越氏館跡	※	中	
53	川越城	※	近	
54	入間川西河床	※	縄前(関・里・譜)	
55	入間川東河床	※	縄早・前(関・里・譜)	
56	上老院	※	縄後	
57	雨沼1	上尾	縄前	
58	荒川河床	※	縄前(十三)・後(堀)	丸木船
59	平方	※	縄早	
60	稲荷台	※	縄前、弥、古墳	
61	薬師耕地前	※	縄早・中、弥、古墳	
62	冥輪Ⅰ・Ⅱ	※	旧、縄前、中・近	
63	小林	※	縄後	
64	殿山・殿山古墳	※	旧、古墳	
65	在来	※	縄前・晩	
66	塚口	※	縄中	
67	下	※	縄中	
68	小谷津	※	縄中	
69	後山	※	縄前貝塚	
70	熊野神社古墳	福川	古墳前(後半)～中	円墳
71	高井南	※	縄中、奈・平	
72	高井	※	縄文	
73	高井東	※	縄後・晩	
74	諏訪野	※	縄中	
75	谷津貝塚	※	縄早・中	早期貝塚?
76	前原	※	縄前(末)、古墳前、奈・平	
77	デーノタメ	北本	縄中・後	
78	市場	※	縄早、古墳	
79	宮園末川神社	※	旧、縄早・前・中・後・晩	宮園Ⅰ・Ⅱ含む
80	阿弥輪堂	※	縄早・前・中、古墳後	
81	馬室埴輪窯跡	鴻巣	古墳後	
82	赤台	※	旧、縄早・前・中・後、古墳 奈・平、中	

Ⅲ 遺跡の概要

三竹遺跡は、旧入間川と荒川の合流点にほど近い川島町大字出丸中郷字横塚365番地に位置する。今回の調査地点は、川島町内を大きく蛇行する旧荒川流路跡の南端部に当たり、標高10～11mの自然堤防上に立地しているため、遺跡形成に関わった人々の生活もこのような地形的条件に大きく制約されており、検出された遺構もこの地形に沿ったものとなっていた。

第4図からも明らかなように、調査区の西側には荒川の旧流路が見られ、東側にも白山池をはじめとした旧流路の痕跡が認められる。グリッド呼称の4列から9列が、南北方向に続く自然堤防の微高地となっている。

調査区内からは5基の古墳が検出されたが、およそ50mという自然堤防の幅の制約を受けながら、南北方向に細長く展開している6世紀代の古墳群の一部である。調査区の北側に隣接する白山神社は、自然堤防上のより高い地点に当たり、境内には前方後円墳が営まれていた。今回検出した5基の古墳の中で、第1号古墳跡と命名したものは、直径15mのひときわ大きなものであり、二重の周溝が検出された。また、遺物の出土状況も、円筒埴輪、形象埴輪、土師器と須恵器がそれぞれ異なった範囲を中心として周溝内に分布しており、古墳をめぐる祭祀の状況について示唆的である。土師器環と須恵器甕の共存関係についても良好な例であると言える。

生活に密接に関わる施設としては、掘立柱建物跡が2棟、土壌が11基検出されている。これらの遺構も、この南北方向に細長く伸びる自然堤防上に見られる。遺構の性格上、覆土からの検出遺物が極端に少なく、時期の決定が困難であったため、奈良時代以降としか推定できなかった。

生産に関わる施設としては、溝跡が19条検出で

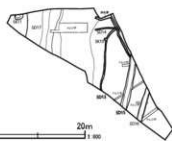
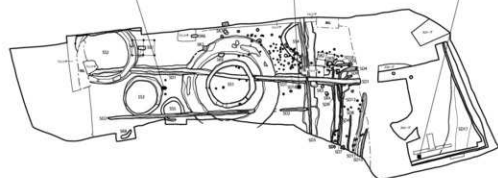
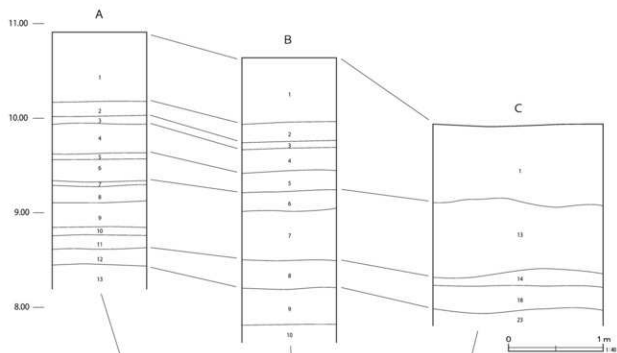
きた。この中で17条は、旧荒川の流路とほぼ平行に南北方向に向かうものであり、田畑の用排水に関わる施設として、重複しながら現代まで連絡と使い続けられてきたものである。

第17号溝跡は、調査区の東端から検出され、幅10mの大きなものであり、自然堤防の東側を流れる旧流路の一部であった可能性が高い。覆土の中位からは、まとまった遺物が出土した。この遺物群は、縄文土器から9世紀の須恵器まで様々な時代のものがほとんど層位差なしに分布しており、特別の廃棄行為が想定できる。遺物の中には、「貫」、「玉」、などの墨書土器も9点見られた。

今回検出された溝の中には、自然堤防を横断する方位を持った、第1号溝跡と第2号溝跡が見られた。第2号溝跡は比較的新しく、自然堤防周辺の低地部分かなり埋没し、比高差が少なくなった時代のものである。一方、第1号溝跡については、覆土の観察結果から、少なくとも中世にさかのぼる可能性が指摘できる。自然堤防を横断する溝が掘削された目的について興味深い。

調査区内からは、縄文土器も多数検出された。基本土層を図3に示したが、A、B両地点では、表土層直下から第2層上面が古墳時代から中近世にかけての遺構検出面であり、第3層から縄文後期前半の土器が出土したので、未検出ではあるが、後期の生活面が存在した可能性が考えられる。

C地点では、第13層を浸食して形成された第17号溝跡の覆土から、縄文時代中期の勝坂式終末から加曾利EⅢ式、堀之内Ⅰ式の各土器群が見いだされた。ただし、平安時代の堆積である。また、第13層下では、炭化物や焼土粒を含む土層が確認され、第14、第18層からは、加曾利EⅤ式土器が、F-11グリッドでは、第18層から縄文時代中期後半の連瓦文系土器が検出された。



A地点

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 1 灰黄色土 | 表土層 |
| 2 灰白色土 | シルト質 粘性やや強 |
| 3 黒褐色土 | しまり強 第一次調査区中央から東側で検出 縄文後期土器出土 |
| 4 灰白色土 | シルト質 鉄分沈着 |
| 5 灰褐色土 | 細砂粒の單純層 |
| 6 灰白色土 | 4層に近似 |
| 7 灰褐色土 | 5層に近似 |
| 8 灰白色土 | 4層に近似 |
| 9 灰白色土 | 均質な粘土層 鉄分沈着。粘性強 |
| 10 灰黄色土 | 均質な粘土層 鉄分沈着。粘性強 |
| 11 黒褐色土 | 均質な粘土層 炭化物含む |
| 12 灰褐色土 | 均質な粘土層 炭化物少量 |
| 13 浅黄褐色土 | 均質な粘土層 下部は青灰色の還元状態 |

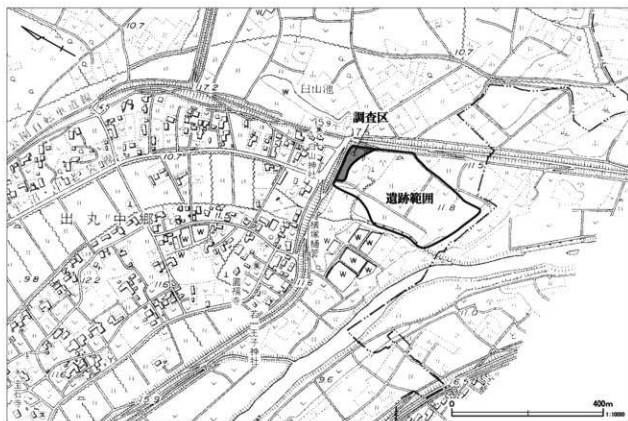
B地点

- | | |
|--------|------------|
| 1 灰黄色土 | 表土層 |
| 2 灰白色土 | シルト質 粘性やや強 |
| 3 黒褐色土 | しまり強 |
| 4 灰白色土 | シルト質 鉄分沈着 |
| 5 灰黄色土 | 均質なシルト質土 |

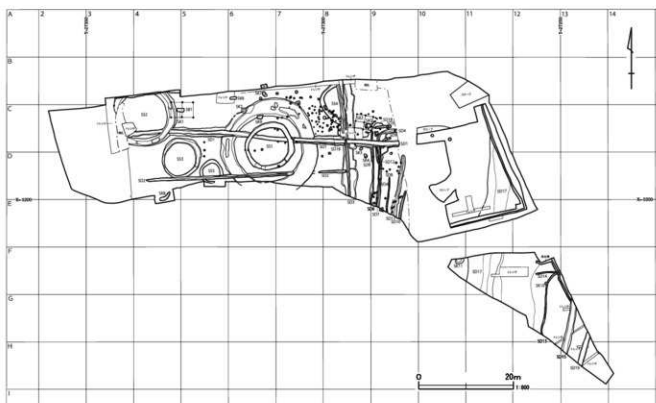
C地点

- | | |
|----------|------------------------|
| 1 灰黄色土 | シルト質 細い砂粒混入 近世以降の堆積土 |
| 13 浅黄褐色土 | 鉄分多量に沈着 粘性・しまり強 |
| 14 黒褐色土 | 鉄分多量に沈着 粘性強。縄文中期後半土器出土 |
| 18 褐色土 | 炭土質 |
| 23 灰褐色土 | 炭土粒少量 |
| 均質な粘土層 | 下部は青灰色の還元状態 |

第3図 基本層序



第4図 遺跡位置図



第5図 全測図

Ⅳ 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) グリッド出土縄文土器 (第6～9図)

三竹遺跡の調査では、自然堤防の平坦部分であるB-C-8～9グリッドと、D-E-11グリッドで検出された第17号溝跡の2箇所から縄文土器が出土した。B-C-8～9グリッドは古墳が築造された自然堤防の平坦部分に当たり、第1図に示した縄文後期の土器群は、古墳時代から中近世の遺構検出面下の第3層土面で出土した。出土した範囲が限られており、集中して出土していたことから、遺構の存在も想定したが、検出することはできなかった。

第6図はB-C-8～9グリッドで検出された縄文土器である。1は、沈線が施文された部位で破損しているが、並行沈線で曲線的な文様が描かれていることから、恐らく称名寺式の糸譜を引く土器と想定される。2は沈線が浅く風化を受けて残存状況が良くないが、文様帯下端×画の沈線が器面を廻ることから、後期後葉の円筒形深鉢の胴下部であろう。3～5は同一個体と推定される。口唇内面に沈線が廻る円筒形の深鉢形土器である。器面には外反する無文の口縁部下に4状の沈線が廻り、沈線端部が上下交互に弧状に閉塞する文様が施文されているものと考えられる。

第7～9図に掲載した資料は、E-11グリッドおよび第17号溝跡から出土した縄文時代中期から後期の土器群である。第3図の基準土層で示したように、調査範囲の東側に位置する10～13グリッド列は、古墳が築造された平坦な自然堤防が東側

にむかって緩やかに傾斜し、やや低まった地形を示している。1、3をのぞき、C-11からG-11グリッドにかけて検出された第17号溝跡の埋土の下層から、埴輪や土師器、須恵器などと混在しており、出土状況からみて、恐らく平安時代頃に、何らかの理由で一括して投棄されたものと考えられる。いずれも酸化鉄やマンガン等の付着が顕著な点で共通している。

器形が判別できる資料は1～3の3点のみであった。1、2は連弧文土器である。第7図1は第17号溝跡の調査中に縄文土器が出土したことから、縄文時代の包含層を確認するため、E-11グリッドに設定したトレンチから出土した。出土層位は第18層である。口唇直下を廻る2条の平行沈線上に円形刺突文が密に施されている。体部上半には3条の単沈線で連弧文が描かれているが、沈線間に磨り消しは施されていない。胴部×画線の有無は不明である。地文は斜条体Lの縦回転施文である。口径23.2cm、現存高10.3cmである。

2は胴部の二条の区画線から上半に連弧文が描かれている。沈線は2条の可能性がある。体部最大径が15.4cmで、1に比べやや小型である。

3は1と同様、トレンチ第18層から出土した土器である。磨り消し懸垂文が垂下する加曽利EⅢ式古段階の土器である。底径6.6cm、現存高8.7cmである。

第7図4～第9図は、第17号溝跡の埋土下部か



第6図 グリッド出土縄文土器 (1)

ら出土した縄文土器破片を一括した。4は方形に区画する隆帯上に、斜位の刻目が施されていることから、勝坂式終末期の土器であろう。5は胎土や整形等から、「く」の字状に屈曲するか、或いは強く湾曲する口縁の無文部と想定され、4と同時期と推定される。

6～10は加曾利EⅠ式後半からEⅡ式前半期に想定され、キャリパー状を呈する深鉢形土器である。6は口唇上に突起を有する。文様を描く隆帯は断面カマボコ状で、両側の沈線も深く幅広である。7は長方形と渦巻文が交互に施文される口縁部で、6に比べやや後出的様相を示す。8～10は胴部破片で、8は蛇行懸垂文、9は渦巻状となる胴部文様の一部と推定される。10は然糸地文上に懸垂文が施されている。

11～18は曾利系と考えられる土器を一括した。11は口縁部に半截竹管で半円掘り状の槽曲文が描かれた土器である。11は口縁部に半截竹管により粗い沈線文が施文された土器である。13～14は同一個体で、条線地文上に貼付された隆帯には刻目が施されている。15は隆帯両側が、棒状工具により交互に刺突されている。16は無文の口縁部から胴部の破片である。文様帯を区画する隆帯に接して、胴部文様を構成する二条の隆帯が垂下する。地文は条線である。17～18は同一個体であろう。断面三角形の隆帯文と沈線文が施文された個体である。

19～23には連弧土器を一括した。小破片のため、1～2との比較は難しいが、19、22の然糸地文と、20～21の縄文地文、23の条線地文がある。22は胴部を区画する沈線間が磨り消されていることから、第7図3と同時期と想定される。

第7図24～第8図49には、磨り消しが施された加曾利EⅢ式古段階と考えられる土器群を一括した。破片総量の中で最もまとまっている。24～29はキャリパー形の口縁部破片である。文様は長方形と渦巻文が交互に施文される土器だが、6～7と比

較すると、隆帯が扁平化する傾向が窺える。

30～31は鉢形土器と想定される。31は口縁部の屈曲が顕著で、地文が羽状に施文されている。また、沈線で区画された口縁部文様内には刺突が施されている。

32～43には胴部破片を一括した。32のように平行磨り消し懸垂文間に蛇行懸垂文が施文されるものや、38のように逆U字状の磨り消し文が施されるもの、42、43のように、キャリパー形深鉢とは異なる器形で、括れ部を境に体上半や下半に逆U字状あるいは楕円形の文様が描かれるものなどがある。

44～49には口唇直下あるいは頸部に円形刺突が施される土器群を一括した。44～46の器形は30に近似し、ほぼ同時期の所産であろう。あるいは磨り消しを伴う連弧文の可能性も考えられる。

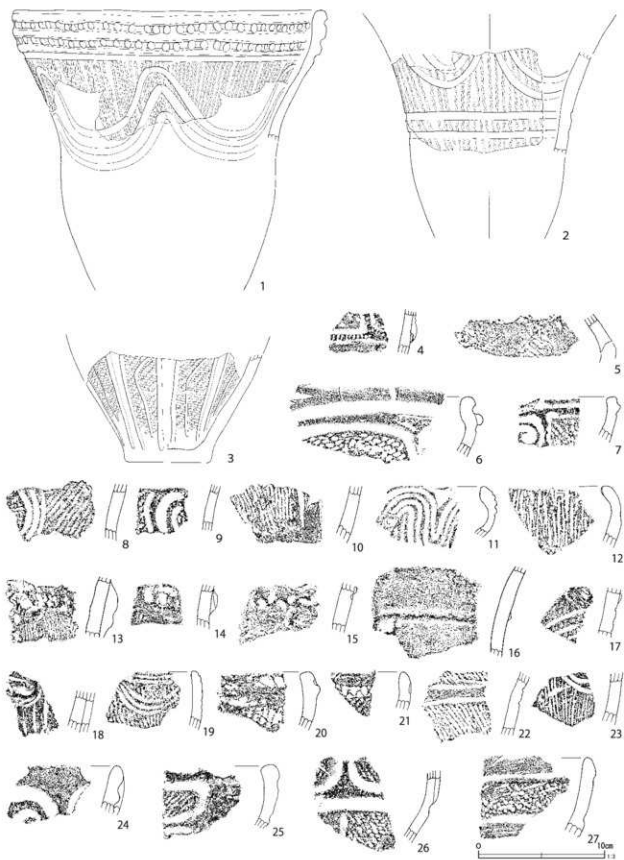
50～58は加曾利EⅢ式の新段階と考えられる土器を一括した。50は断面三角形の隆帯と幅広く浅い沈線で口縁部文様が描かれる土器である。51は無文口唇部に幅広い磨り消し懸垂文が垂下する深鉢形土器である。52～53は鉢形土器で、無文部下に沈線が廻る。体部は不明だが、52は地文が「RLR」であり、古段階に遡る可能性がある。

55は胴部隆帯文の土器で、断面三角形の2条の隆帯で大柄な渦巻文が描かれる土器であろう。

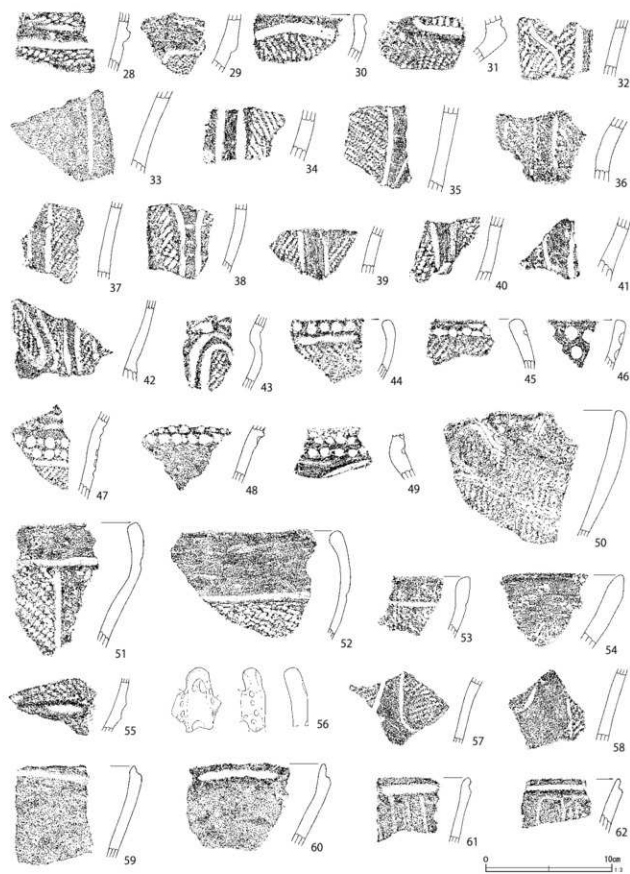
56は口唇突起である。正面には「の」状や「S」状の沈線文が、両側には円形刺突文が施文されている。

57、58は対向するU字状の文様が施文されており、38や42、43と比較すると沈線が細く浅い傾向がある。加曾利EⅢ式新段階からEⅣ式古段階の古井城山類型と考えられる。

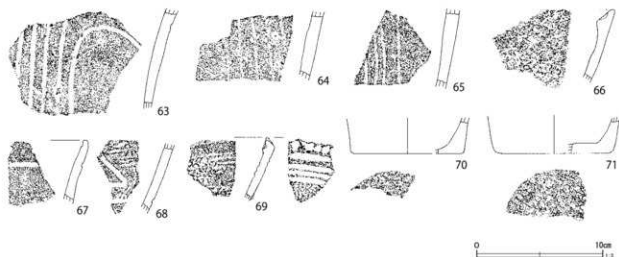
第8図59～第9図71は堀之内Ⅰ式後葉の土器群である。59、60は口唇直下に沈線が廻り、無文の口頸部を有する深鉢形土器である。小破片のため全容は不明だが、口唇部には59や60のように円形刺突を扶んで沈線が廻る可能性がある。60、61は体部に沈線文が施文される土器である。沈線の残



第7図 グリッド出土縄文土器(2)



第8図 グリッド出土縄文土器(3)



第9図 グリッド出土縄文土器(4)

存状況からみると、直線的な懸垂文を挟んで、62のような逆U字、あるいは63のように対向するU字状文が描かれると想定される土器であろう。64、65は複数条の沈線が垂下する胴部破片で、胎土が酷似しており、63と同一個体の可能性がある。

66は無文口縁部で、内面には波頂部の「の」状の沈線を挟んで1状の沈線が廻っている。器面に文様は施されていない。

67～69には堀之内Ⅱ式と考えられる土器群を一括した。67は口唇内面に沈線が廻り、口唇端が内折する。器面にも一状の沈線が巡るが、残存部に文様は観察されない。68は胴中位の破片と思われ、文様帯内に三角ないしは菱形状の文様が描かれる土器であろう。沈線間には縄文1Rが充填施文されている。69は内外面に沈線が施文されるが、表面は風化が著しく、僅かに痕跡が観察されるにすぎない。内面には口唇直下を廻る沈線間に凹形刺突が施されている。

70～71には縄代Ⅱ期をもつ底部を一括した。風化が著しいが、形状や胎土から縄文時代後期前半に属するものと考えられる。

(2) グリッド出土石器 (第10図)

第10図に調査区から出土した石器を一括した。石器は全て第17号溝跡の埋土下部から、第6～9

図に示した土器とともに出土したものである。図示した製品以外に黒曜石の剥片等も出土したことから、遺跡内で石器製作が行われていた可能性が考えられる。黒曜石の剥片類については、第2表に法量を示した。

石鏃(1、2)

1、2はともに凹基石鏃で、挟りはやや浅い。1は両側縁が弧状を呈する。2は片面に第1次剥離面を残し、両側縁は直線的で丁寧な剥離が施されている。いずれもチャート製である。

打製石斧(3～6)

出土した4点の打製石斧は全て欠損品である。3はホルンフェルス製の打製石斧である。刃部と両側縁および基部の一部が欠損している。比較的扁平な河原石の基部と両側縁および刃部に粗い剥離を施すことで形状を整えている。

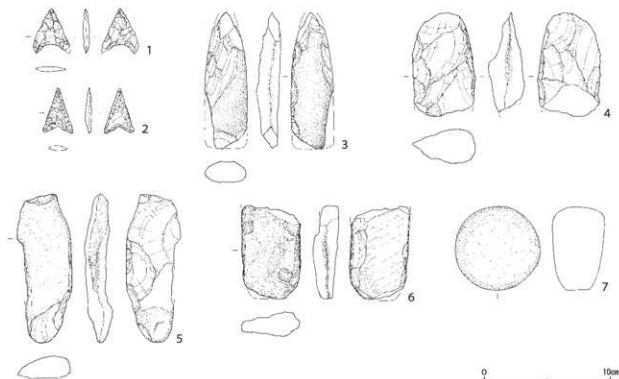
4はホルンフェルス製の打製石斧で、両面に粗い剥離が施された肉厚な造りである。片側縁に刃潰しの敲打痕が認められる。大半が欠損しており全容は不明である。

5は3と同様に、河原石に粗い剥離を施した不安定な形状だが、刃部を作出したとみられることから打製石斧と判断した。ホルンフェルス製で、両面に自然面が残されている。

6は片面に2箇所の窪みが存在することから、結晶片岩製の石皿ないしは窪み石の欠損部位を打製石斧に再加工したものと考えられる。扁平で片側縁に鋭打痕が認められる。

磨石

7は安山岩製の磨石である。両面や側縁部全体がよく磨られているため、平面が楕円形、断面が台形を呈している。



第10図 グリッド出土石器

第2表 グリッド出土石器観察表

図	図版	器種	出土位置	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	石材	備考	
1	13-2	石鏃	D-11	1.7	1.4	0.3	0.53	チャート		
2	13-3	石鏃	D-11	1.8	1.2	0.3	0.33	チャート		
3	13-4	打製石斧	F-11	10.7	3.4	1.8	86.00	ホルンフェルス		
4	13-5	打製石斧	F-11	8.2	5.0	2.7	129.32	ホルンフェルス		
5	13-6	打製石斧	D-11	11.7	4.4	1.9	108.70	ホルンフェルス		
6	13-7	打製石斧	F-11	7.3	4.7	1.9	88.35	結晶片岩		
7	13-8	磨石	D-11	6.5	6.8	4.1	274.39	安山岩		
-	-	剥片	D-11	2.5	1.8	0.9	3.06	黒曜石		被熱
-	-	剥片	D-11	1.6	1.2	0.8	1.50	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	2.4	1.9	0.9	2.94	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	2.3	0.6	0.3	0.35	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	0.6	0.6	0.1	0.05	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	2.9	1.0	0.9	2.02	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	2.7	2.0	0.6	2.53	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	1.9	1.6	0.5	1.25	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	0.7	0.7	0.1	0.05	チャート		
-	-	剥片	F-11	1.4	0.5	0.2	0.12	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	1.8	1.2	0.4	1.28	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	1.1	0.9	0.2	0.27	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	1.9	1.8	1.0	2.07	黒曜石		
-	-	剥片	D-11	3.7	4.2	1.0	9.08	チャート		

2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 古墳跡

三竹遺跡からは、5基の古墳跡が検出された。いずれも円墳であり、およそ5世紀末から6世紀初頭に築造されたものであると考えられるが、第1号古墳跡、および第2号古墳跡以外では、古墳に帰属すると判断できる確実な遺物が検出できなかったため、具体的な時期は曖昧である。また、三竹遺跡の周辺には前方後円墳とされる白山古墳が存在しているが、詳細は不明である。

なお、試掘時にヨコハケを持つ埴輪が見つかったが、調査区内からは当該時期の古墳跡は検出できなかった。

第1号古墳跡（第11～17図）

C-6・7、D-6・7グリッドを中心に検出された。2重の周溝が巡る特徴的な形態をしていた。北東側に第4号古墳跡、西側に第2、3、5号古墳跡が近接していた。第1、2、18号溝、第2、9号土壌と重複しており、これらの遺構によって壊されていた。今回の調査区内では、全体のおよそ9割程度を調査した。平面形態は円形で、確認面での墳丘径約14m、周溝径約20mであった。墳丘盛土は残存しておらず、主体部も検出できなかった。周溝の規模は、幅は、外側が3m、内側が1m、深さは外側が0.2m、内側も0.2mであった。周溝底面の形状は輪広の逆台形であった。

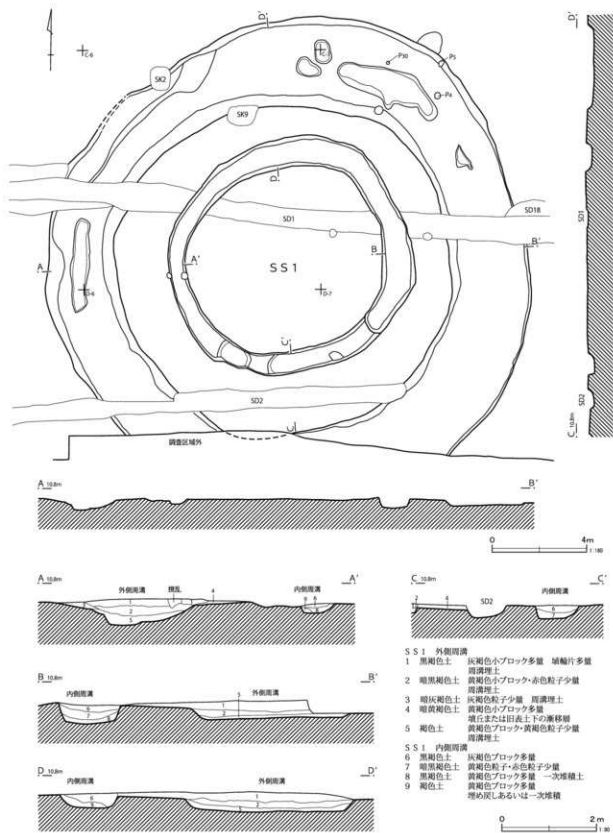
今回の調査区の中では、最も多くの遺物が出土した。

遺物は、周溝内に流れ込んだ状態で検出され、周溝底面からやや浮いていた。分布については、大きく4つのグループに分けて考えられる。南西側に土師器環類と須恵器甕等の供献された土器類が集中し、反対側の北東側に人物や馬等の形象埴輪が集中していた。また、北西側と南東側には、円筒埴輪が集中していた。このような状況は、20m規模の円墳での、埴輪設置状況を表す良好な事例と言える。

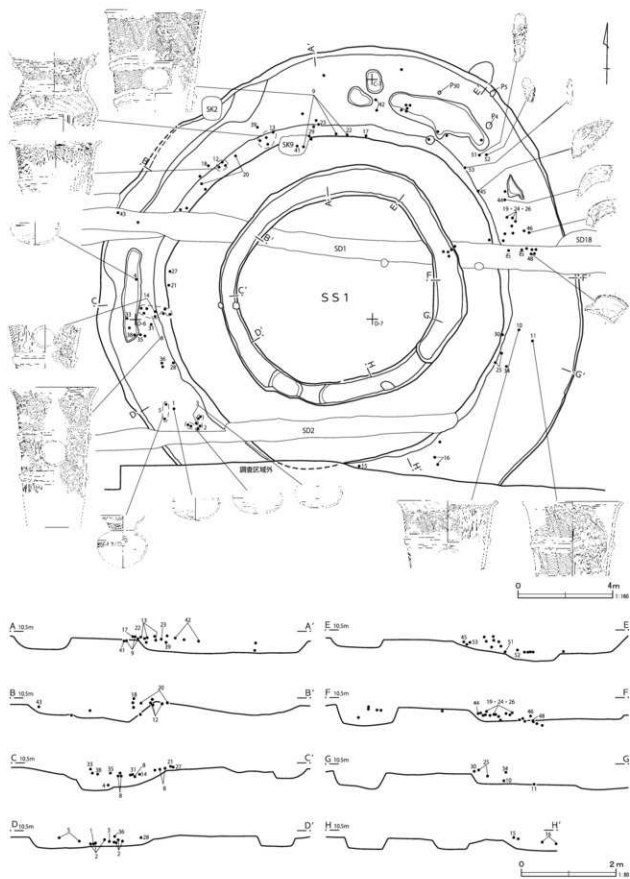
第1号古墳跡から出土した遺物の中で、土師器や須恵器の土器類を第13図に示した。既に述べたように、これらの土器類は南西側からまとまって出土しており、墓前に供献されたものであると考えられた。1～3は、いわゆる比企型の坏であり、かなり古い様相を示している。特徴となる赤彩は、内面の全体と外面のヘラケズリ上端の少し下まで見られる。形態もやや深く、口端部内面には沈線や沈線の痕跡も認められない。成形に回転台は使われておらず、胎土に比較的大きな円磨したチャート粒を含んでいる。これに対して、4は赤彩された模倣坏である。形態は模倣坏であるが、成形に際して回転台は使われていない可能性が高く、胎土の特徴も、共伴した比企型坏に類似していた。5は須恵器甕であり、口縁部が太くて短い須恵的な特徴から、TK-23型式に相当すると考えられる。6、7も須恵器甕の破片であるが、5とは別個体であるが、同様におおよそTK-23型式段階のものであると考えられる。

埴輪は多数出土したが、図示可能な円筒埴輪を第14図から16図に、形象埴輪を17図に示した。8は、第1号古墳跡から出土した円筒埴輪の中では最も残存率が高いもので、やや細身で器肉も薄く仕上げられている。突帯設定線が見られる。9～12、14も比較的高い残存率の高い円筒埴輪である。10、14には突帯設定線が見られ、11、12、14には透孔が一部残存していた。また12は成形御早に、口端部を内面から強く押さえられており、口端部内面に特徴的な段が認められ、端部に窪みが見られる。13、23、28、32は、いずれも朝顔形の円筒埴輪である。13の肩部外面には、図示したように斜め3本線のヘラ記号が認められる。32にも外面肩部に弧線状のヘラ記号が認められる。

14～24までは、口縁部の破片である。この中で、14、16には突帯設定線が見られ、14～17は透孔が



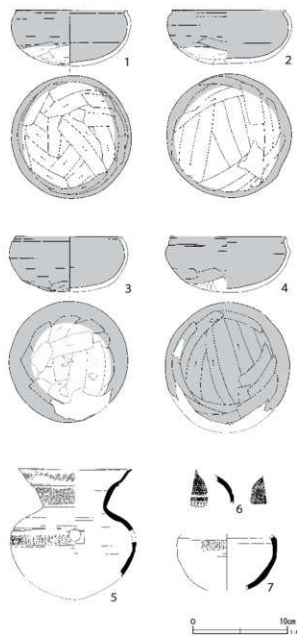
第11図 第1号古墳跡



第12图 第1号古墳跡遺物出土状況

第3表 第1号古墳跡出土遺物観察表 (1)

図	種別	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	残存率 /%	焼成	色調	図版	備考
1	土師器	坏	11.8	5.9	—	EGHI	100	良好	にぶい赤褐色	14-1	比企型坏 赤彩
2	土師器	坏	12.1	5.6	—	EGI	95	良好	にぶい褐色	14-2	比企型坏 赤彩 内外面二次被焼
3	土師器	坏	11.3	5.8	—	CEGI	90	良好	にぶい赤褐色	14-3	比企型坏 赤彩
4	土師器	坏	12.3	5.9	—	EHIL	85	普通	にぶい赤褐色	14-4	比企型坏 赤彩
5	須恵器	甕	(12.0)	[11.5]	—	EGHI	20	良好	灰	14-5	
6	須恵器	甕	—	[3.0]	—	EGI	破片	普通	灰	14-6	
7	須恵器	甕	—	[5.9]	—	EI	20	良好	黄灰	—	



第13図 第1号古墳跡出土遺物 (1)

一部残存した。また、17の透孔は特徴的な横長であった。22には、内面右の割れ口に沿ってヘラ記号が見られた。

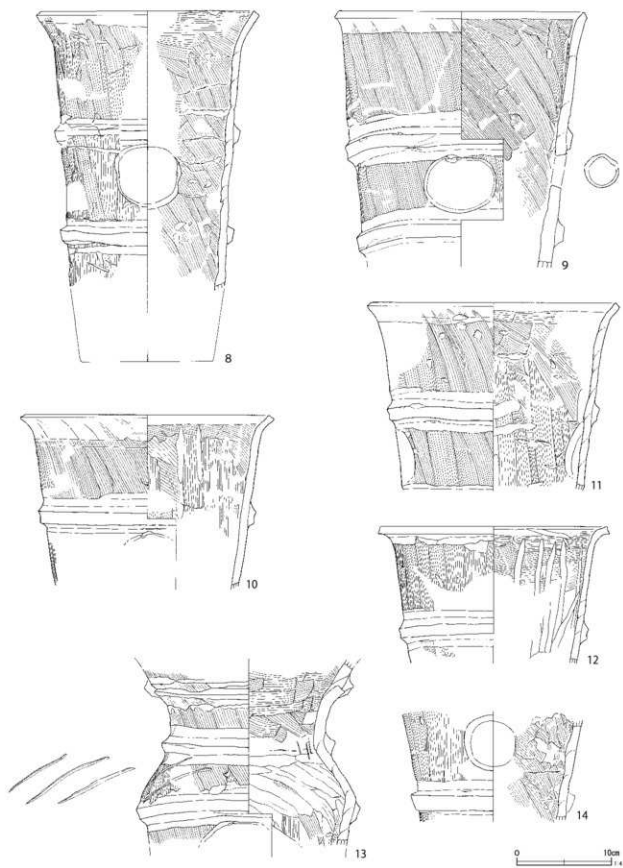
26~40は円筒埴輪の胴部破片である。この中で、26には突帯設定線が認められ、25~27、29、30、38には、透孔が一部残存していた。また31は突帯が比較的高く、後述する類似した一群の特徴と考えられる。

41~43は円筒埴輪の基部破片である。この中で41には、底面に棒状圧痕、基部外面に木目圧痕が認められた。また底面には成形時に地面に置かれた際の痕跡と考えられる砂粒の抱え込みが認められた。42、43の底面には圧痕が認められず、43には基部外面に木目圧痕が見られた。

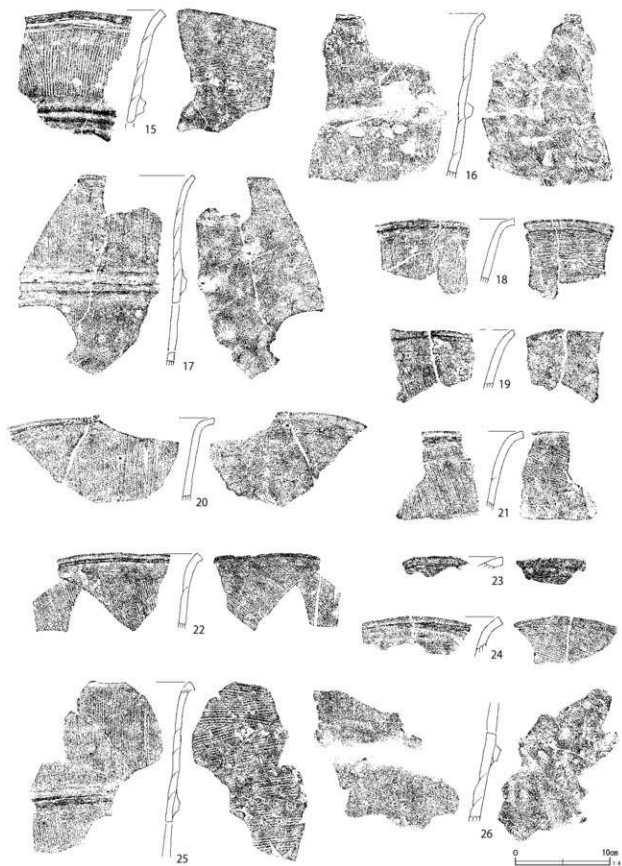
基部の外側調整痕跡の中で、41では工具による比較的強いナゲ下ろしによって、下端に向けての表面粘土の移動が顕著に認められた。

なお円筒埴輪の中で、34は極めて硬質であり、焼成が他とは全く異なっていた。ただし、25も下半はやや堅く焼き締まっており、同一個体中でも部位によって焼成の状況が大きく異なっている。経験的に、焼成後の風化作用が緩やかなものであるほど、焼成時の焼きしまりの差が顕在化すると考えられる。

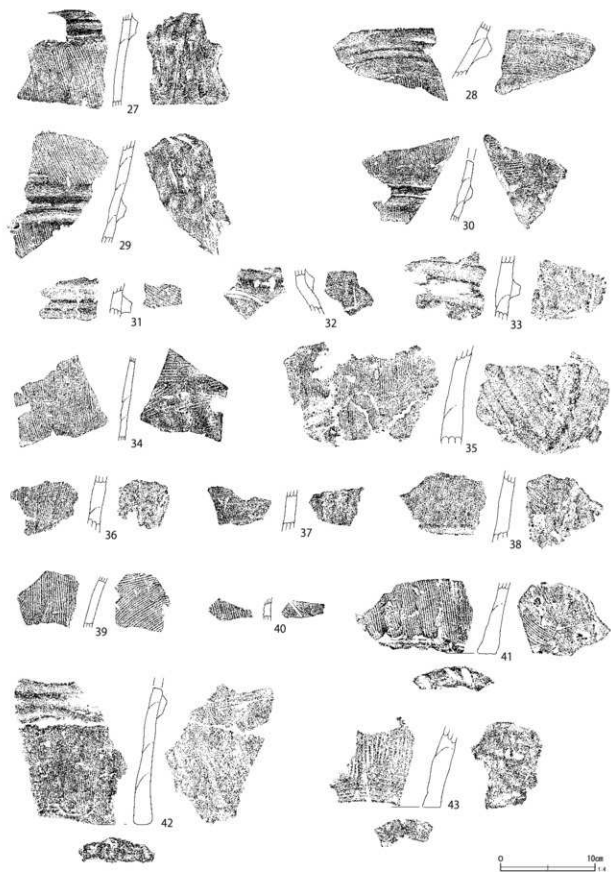
また、31、33、35、36、38は、特徴的な極めて粗雑な胎土をしており、やや堅く焼き上げられているが、器内は厚く小礫を多く含んでおり、表面に微細なひび割れが多く見られる。



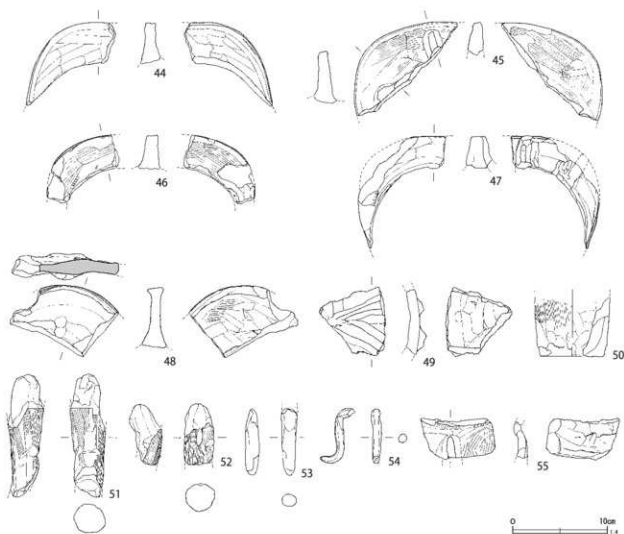
第14图 第1号古墳跡出土遺物(2)



第15图 第1号古墳跡出土遺物(3)



第16图 第1号古坟跡出土遺物(4)



第17図 第1号古墳跡出土遺物(5)

第4表 第1号古墳跡出土遺物観察表(2)

図	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	焼成	色調	残存 /%	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	図取	備考
8	円筒	(23.5)	[29.6]	—	EHK	良好	橙	45	タテ 10	ココ・ナナメ 10	154	N87-91-92-94-95-97-98 突帯設定線 板押正直
9	円筒	(26.7)	—	—	AEHK	普通	にぶい黄橙	40	ナナメハケ 11	ナナメハケ 11	152	中間段に小円孔を穿つ
10	円筒	(26.6)	—	—	CEHK	普通	にぶい黄橙	40	ナナメ 10	ナナメ・タテ 10	153	N65 突帯設定線 透孔一部残存
11	円筒	(26.6)	—	—	AEHK	普通	にぶい黄橙	35	ナナメ 9	ココ・ナナメ・タテ 10	154	N67 透孔一部残存
12	円筒	(24.4)	[14.5]	—	EGHI	普通	橙	35	タテ	ココ・ナテ	155	N12-13-14 口縁角状 左利き
13	壺	—	—	—	EHK	普通	にぶい黄橙	60	ナナメ 10	ココ・タテ 10	156	N17-18-19 肩部外面へフ記号
14	円筒	—	—	—	AEGHI	良好	橙	40	タテ 9~10	ナナメ 10	—	N84-96 突帯設定線 透孔一部
15	円筒	—	—	—	ACEHK	普通	明黄橙	破片	タテ 8~9	ココ 8~9	161	N106 透孔一部残存
16	円筒	—	—	—	EHK	不良	にぶい黄橙	破片	タテ 16~17	ナナメ・タテ 12~13	161	N72-73 透孔一部 突帯設定線
17	円筒	—	—	—	ACEHI	普通	明黄橙	破片	タテ 12	ココ・ナナメ 11~12	161	N31 透孔横長楕円形
18	円筒	—	—	—	ACEHK	普通	橙	破片	タテ 11~12	ココ・ナテ 11~12	161	N11 器面風化顕著
19	円筒	—	—	—	ACEHK	不良	橙	破片	タテ	ナナメ	161	N50 器面風化顕著
20	円筒	—	—	—	AEHK	普通	橙	破片	タテ 11~12	ココ・ナテ 10	161	N9-15

21	円筒	—	—	—	AEHI	普通	浅黄橙	破片	ナナメ 10	ヨコ・ナデ 10	161	No.4
22	円筒	—	—	—	EHHK	良好	浅黄橙	破片	ヨコ・ナナメ 10	ナナメ・ナデ 12	162	No.30 内面へラ記号一部残存 2区 内面須恵質 器面風化顕著
23	朝顔	—	—	—	AEHK	普通	にぶい黄橙	破片	ナデ	ナデ	162	器面風化顕著
24	円筒	—	—	—	AEHKL	普通	にぶい黄橙	破片	ヨコナデ	ナナメ 7~8	162	No.50
25	円筒	—	—	—	CEHI	良好	橙	破片	タテ 10	ナナメ・ナデ 8	162	No.69-70 透孔一部残存
26	円筒	—	—	—	AEghi	不良	浅黄橙	破片	タテ 10	ナデ	162	No.50 透孔一部残存 突帯設定痕 外面板押圧痕 器面風化顕著
27	円筒	—	—	—	EHL	良好	浅黄橙	破片	ナナメ 10	ナデ	162	No.5 透孔一部残存
28	朝顔	—	—	—	ACEHI	良好	にぶい黄橙	破片	タテ 10	ヨコ 12	162	No.84 花状部片
29	円筒	—	—	—	ACEHI	良好	にぶい黄橙	破片	ナナメ 10~11	ナデ	162	No.24 透孔一部残存
30	円筒	—	—	—	EHHK	良好	橙	破片	タテ 12	ヨコ・ナデ 10	162	No.66 透孔一部残存
31	円筒	—	—	—	EHHKL	普通	橙	破片	ヨコナデ	ナナメ 8~9	162	No.89 突帯高い
32	朝顔	—	—	—	EHHKL	普通	浅黄橙	破片	ナナメ 12	ナデ	162	2区 前面外面へラ記号一部残存
33	円筒	—	—	—	EHHKL	普通	橙	破片	タテ 12	ナデ	171	No.108 中型品か
34	円筒	—	—	—	AEHK	良好	橙	破片	タテ 12	ナナメ・ナデ 7	171	No.68 須恵質 突帯板押圧痕
35	円筒	—	—	—	AEHKL	普通	橙	破片	タテ 7~8	ナデ	171	No.8 中型品か
36	円筒	—	—	—	AEHKL	普通	橙	破片	タテ 10~11	ナデ	171	No.85 中型品か
37	円筒	—	—	—	CEHHK	普通	にぶい黄橙	破片	タテ 9	ナナメ 12	171	No.30 内面へラ記号
38	円筒	—	—	—	EHHKL	普通	橙	破片	タテ 10~11	ナナメ・ナデ 8	171	No.90 透孔一部残存
39	円筒	—	—	—	CEHHK	普通	浅黄橙	破片	タテ・ナナメ 10	ナナメ 10	171	No.16 外面交差ハケ 左側き工人
40	円筒	—	—	—	EHHK	良好	にぶい黄橙	破片	ナナメ 11	ナナメ 11	171	2区 内面へラ記号一部残存
41	円筒	—	—	—	AEHI	良好	にぶい黄橙	破片	タテ 10	ナデ・ナナメ 10	171	No.1 基部幅5cm 底面棒状圧痕 赤色粒子付着 基部外面木目圧痕
42	円筒	—	—	—	EHHKL	普通	にぶい黄橙	破片	タテ 12	ナデ	171	No.33 基部幅5.4cm
43	円筒	—	—	—	CEHHK	普通	浅黄橙	破片	タテ 5	ナデ	171	No.1 基部幅6cm 底面平坦 基部外面木目圧痕

第5表 第1号古墳跡出土遺物観察表(3)

図	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	焼成	色調	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	図版	備考
44	馬鞍前輪	—	—	—	EHHK	普通	にぶい橙	ナデ	—	172	No.49 粘土板成形
45	馬鞍後輪	—	—	—	ACEHI	普通	橙	ハケメ 12	—	172	No.47 粘土板成形 粘土細粉付
46	馬鞍前輪	—	—	—	AEHK	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	172	No.55 側面赤彩
47	馬鞍後輪	—	—	—	AEHHK	普通	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	172	2区 粘土細粉付 側面赤彩
48	馬立髪	—	—	—	ACEHHK	普通	にぶい橙	ハケメ・ナデ	—	172	No.65 前面丁字形 側面赤彩
49	馬尻鬘	—	—	—	ACEHK	良好	橙	ナデ	ナデ	172	確認面東 粘土掻の粉付により 帯帯を表現
50	馬脚部	—	—	—	AEHHK	普通	橙	タテハケ 9~10	ナデ	172	確認面東側 基部幅4.2cm
51	人物腕	—	—	—	AEHHK	普通	黄褐	ハケメ 16~17	—	172	No.44 粘土塊による中実成形 掌はやや扁平
52	人物腕	—	—	—	AEHI	普通	にぶい橙	ハケメ	—	172	No.45 粘土塊による中実成形一部赤彩
53	人物 美豆良	—	—	—	EHHK	普通	にぶい黄橙	ナデ	—	172	No.46 粘土塊を棒状に成形
54	人物 耳飾	—	—	—	AEHHK	普通	にぶい黄橙	ナデ	—	172	2区 両端をL字形に折り曲げ 一方を耳孔に挿入する
55	人物 男子頭部	—	—	—	AEHHK	普通	にぶい黄橙	ナデ・ハケメ 7~8	ナデ	172	確認面東側 美豆良の一部残存

44~55は形象埴輪である。44~50は馬形埴輪であり、44~47は鞍、48は立髪、49は尻鬘、50は脚部の破片である。51~55は人物埴輪であり、51、

52は腕、53は美豆良、54は耳飾、そして55は男子頭部の破片である。46~48、52には、赤彩が認められた。

第2号古墳跡 (第18～20図)

C-4グリッドを中心に検出された。南東側に第3号古墳跡が近接していた。

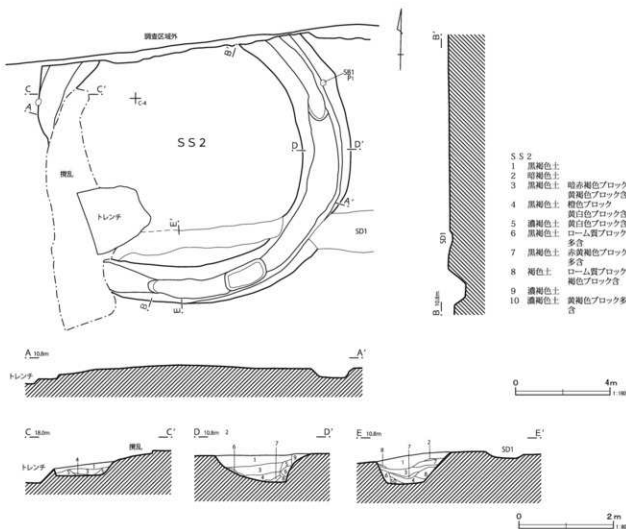
調査区内の西端に位置しており、自然堤防の幅から考えて古墳群の西端に当たると考えられる。

第1号掘立柱建物跡、第1号溝と重複しており、第1号掘立柱建物跡、第1号溝によって壊されていた。また、西側は、攪乱によって大きく削平されていた。今回の調査区内では、全体のおよそ9割程度を調査した。平面形態は円形で、確認面での墳径径約10m、周溝径約13mであった。墳丘盛土は残存しておらず、主体部も検出できなかった。周溝の規模は、幅1.9m、深さ0.4mであった。周

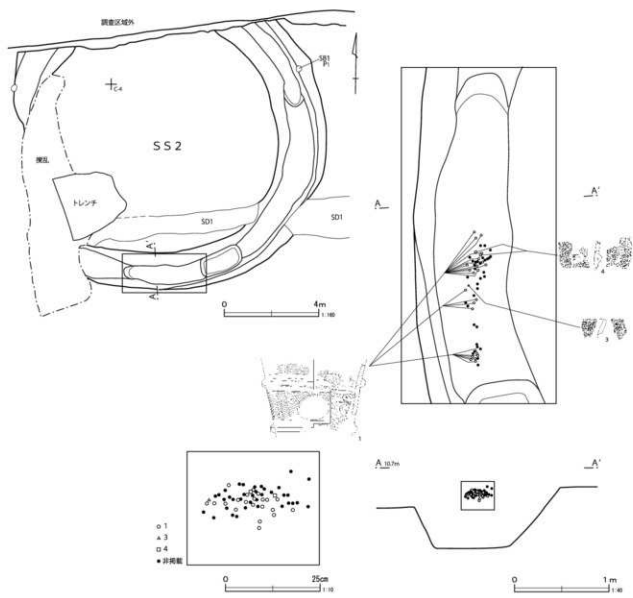
溝底面の形状は、南側では逆台形、東側では外周から墳丘に向けては、緩やかな弧状で墳丘手前以最深部があり、墳丘に向けては、放物線状に立ち上がった。周溝底面に楕円形の窪みや段差が認められたが、遺物が見られず覆土の状況から、堀り方に由来するものと考えた。

遺物は、周溝の南側で集中的に出土した。この中で、図示できたのは5個体であり、いずれも覆土上層から検出された。

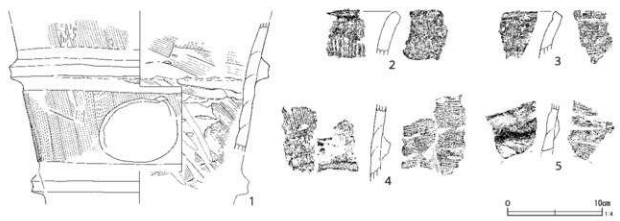
1は、3条凸帯を持つと考えられる比較的大型の破片である。2、3は風化の進んだ円縁部の破片であり、4、5は胴部の破片である。4は凸帯設定線が見られ、5は透孔が一部見られる。



第18図 第2号古墳跡



第19図 第2号古墳跡遺物出土状況



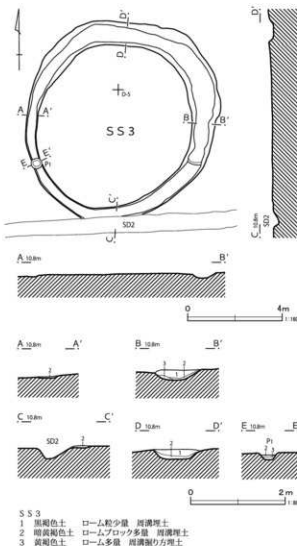
第20図 第2号古墳跡出土遺物

第6表 第2号古墳跡出土土物観察表

図	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	焼成	色調	残存 /%	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	図版	備 考
1	円筒	—	—	—	EGHIK	普通	橙	60	ナナメ 10	ナナメ・ナデ10	181	N ₁ 6・19・21・22・26・28・30・33・35・46 3条突帯か
2	円筒	—	—	—	ACEHIK	普通	橙	破片	タテ 6	ナナメ 9	182	3区 器面風化調査
3	円筒	—	—	—	AEHI	普通	橙	破片	タテ 10	ヨコ 10	182	N ₃₁ 器面風化調査
4	円筒	—	—	—	CEHI	普通	にぶい橙	破片	タテ 10	ヨコ 10	182	N ₁₃ ・15 突帯設定線残存
5	円筒	—	—	—	AEHIK	普通	橙	破片	タテ 6	ヨコ 11	182	3区 透孔一部残存

第3号古墳跡 (第21図)

D-4・5グリッドを中心に検出された。北西側に第2号古墳跡、南東側に第5号古墳跡、東側に第1号古墳跡が近接していた。第2号溝と重複しており、第2号溝によって壊されていた。今回の調査区内では全体を調査したが、かなり削平を



第21図 第3号古墳跡

受けていた。平面形態は円形で、確認面での墳丘径約6.6m、周溝径約8mであった。墳丘盛土は残存しておらず、主体部も検出できなかった。周溝の規模は、幅0.4~1.2m、深さ2~24cmであった。周溝底面の形状は、逆台形であった。

周溝の西側から検出したピットは、古墳に伴うものではないと考えられる。

図示可能な遺物は、検出できなかった。

第4号古墳跡 (第22図)

B・C-8グリッドを中心に検出された。西側に第1号古墳跡が近接していた。

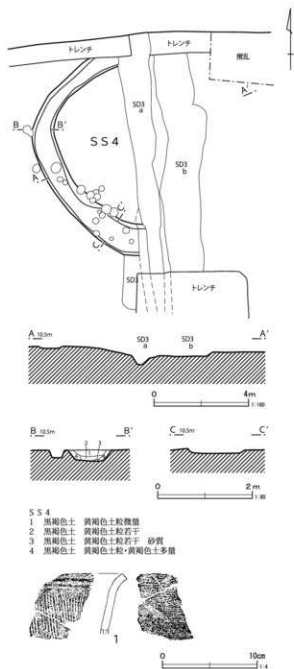
調査区から検出した古墳跡の中では東端に立地し、第17号溝との関係から考えても、自然堤防と低地の境界付近であり、古墳群の東端である可能性が高い。

第3a、b号溝と重複しており、第3a、b号溝によって壊されていた。また、南西側に多数のピットが集中的に検出された。これらのピット群は、調査時の所見では古墳より新しく、周溝の覆土中に作られていた。

今回の調査区内には、古墳のほぼ全体が含まれていたが、東側は溝跡群と著しく重複して削平を受けていたため、周溝が検出できなかった。平面形態はかなり角張った円形で、確認面での墳丘径約7m、周溝径約8mであった。

墳丘盛土は残存しておらず、主体部も検出できなかった。周溝の規模は、幅1m、深さ0.1mであった。周溝底面の形状は、逆台形であった。

遺物は周溝の覆土から出土した、円筒地輪の口縁部破片を1点図示した。



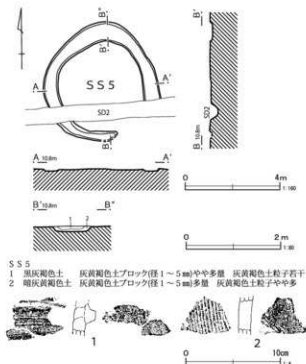
第22図 第4号古墳跡および出土遺物

第7表 第4号古墳跡出土遺物観察表

図	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	焼成	色調	残存 /%	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	図版	備	考	
1	円筒	—	—	—	CEGHI	普通	にぶい黄橙	破片	タテ	8	ヨコ	9	183	

第8表 第5号古墳跡出土遺物観察表

図	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	焼成	色調	残存 /%	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	図版	備	考	
1	円筒	—	—	—	CEGHI	普通	にぶい黄橙	破片	タテ	7	ナナメ・ナデ	184	D5G被覆区	
2	円筒	—	—	—	CEGHI	普通	にぶい黄橙	破片	ナデ	ナデ	184	D5G		



第23図 第5号古墳跡および出土遺物

第5号古墳跡 (第23図)

D-5グリッドを中心に検出された。北東側に第1号古墳跡、北西側に第3号古墳跡が近接していた。第2号溝と重複しており、第2号溝によって壊されていた。調査区内に、遺構の全体が含まれていたが、南東側の周溝は削平されており、検出できなかった。平面形態は多少角張った円形で、確認面での墳丘径約4m、周溝径約5mであった。墳丘盛土は残存しておらず、主体部も検出できなかった。周溝の規模は、幅0.6m、深さ0.1mであった。周溝底面の形状は、逆台形であった。

周溝覆土から検出した埴輪を、2点図示した。

3. 奈良時代以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

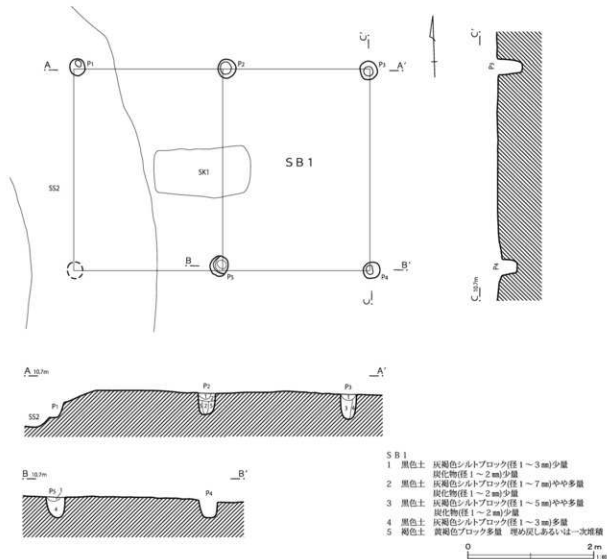
第1号掘立柱建物跡 (第24図)

第1号掘立柱建物跡は、B-4・5、C-4・5グリッドで検出された。第2号古墳跡、第1号土壌と重複していたが、新旧関係は、明らかにできなかった。規模は、東西4.7m、南北3.2mで面積は15.04㎡であった。長軸方位はN-89°-Wであった。柱間距離は、東西各2.35m、南北3.2m、柱穴は長径26~30cm、短径23~29cm、深さ140~145cmであった。

第2号古墳跡との重複により、同遺構の覆土との識別が困難であったため、P1の上半分は検出

できず、ローム質の地山に埋り込まれていた下半分のみを検出した。またP6は、底面まで全ての部分が第2号古墳跡の覆土中に存在していたためやはり識別が困難であり、同覆土の除去前に確認、記録することができなかった。

柱穴の覆土の中で、P2の下層には柱の痕跡と、掘り方充填土層と考えられる土層が、明確に確認できた。ピットの覆土中からの遺物の出土に乏しく、年代を決定できる資料は検出できなかった。従って、奈良時代から近世までの、どの時期に帰属するか明らかにできなかった。



第24図 第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第25図)

第2号掘立柱建物跡は、C-8・9グリッドで検出された。第3号溝跡、第5号土壇と重複していた。規模は、東西3.5m、南北2.9m、面積は10.15㎡であった。主軸方位はN-79°-Wであった。柱間距離は、東西がそれぞれ1.85m、1.65m、南北がそれぞれ1.5m、1.4m、柱穴は長径21~29cm、短径19~27cm、深さ165~195cmであった。

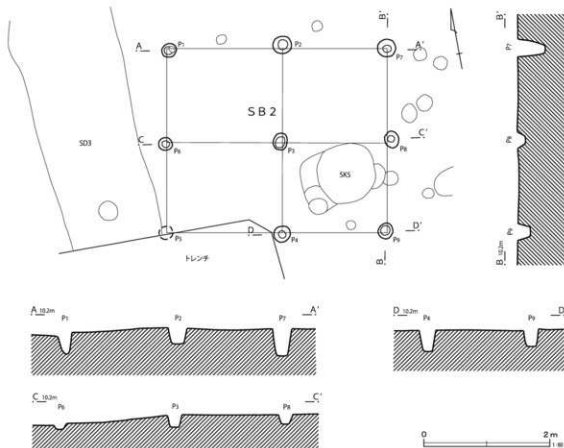
第3号溝との重複により、同遺構の覆土との識別が困難であったため、P5は検出できなかった。したがって、3号溝との新旧関係は明らかにできなかった。

第2号掘立柱建物跡の東側と北側にはそれぞれ複数のピットが存在しており、同遺構との関連性も想定できるが、覆土の色調や位置関係から調査時に検討を行ったが、第2号掘立柱建物跡と周辺

ピットとの関連性を明らかにすることはできなかった。

ピットの覆土中からの遺物の出土に乏しく、年代を決定できる資料は検出できなかった。したがって、奈良時代から近世までの、どの時期に帰属するか明らかにできなかった。

ピットの深さを個別に見てみると、一様ではなく、P1、P4、P7が比較的深く、P2、P9がやや深く、P3、P6、P8がやや浅いという状況であった。この柱穴毎の深さの違いは、正方形に近い総柱の建物である第2号掘立柱建物跡が、側柱で主要な加重を支え、通し柱で安定性を増すという構造をもっており、これが遺構に反映していると考えられる。また、側柱も一様に加重を負担するのではなく、正三角形に近い配置で多くの加重を支えている可能性があり上層の構造が興味深い。

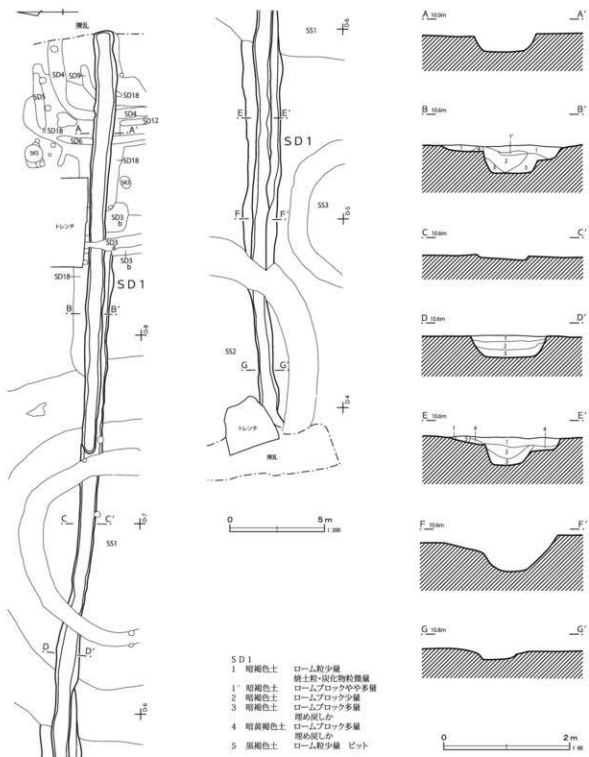


第25図 第2号掘立柱建物跡

(2) 溝跡

調査区内からは、19本の溝跡を検出した。この中で、第17号溝跡からは大量の遺物が検出できたが、他の溝からは遺物はほとんど認められなかつ

た。したがって第17号溝以外は時期決定は困難であったが、他の遺構との重複関係や位置関係、および覆土の状況からそれぞれの時期を推定した。



第26図 第1号溝跡

なお、調査時の第3号溝は、その平面形態から2本の溝と考え、調査時の記録との齟齬を防ぐため3a、3b号溝とした。また第17号溝は、調査時に大溝と呼称したものであり、他の遺構との整合性を保つため、第17号溝と改称した。

第1号溝跡 (第26・30図)

C-3～9グリッドで検出された。第1、2号古墳跡、第3a、3b、4、6、9、18号溝と重複していた。第2号溝と併走し、第3a、3b、4、6、9号溝と交差していた。

走向方向は概ね東→西で、調査区内での底面の落差は0.5mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長57m、幅1.1m、深さ0.2mであった。流れ込みの埴輪破片を若干検出した。

第2号溝跡 (第27図)

D-4～8グリッドで検出された。第1、3、5号古墳跡、第3a、3b号溝と重複していた。第1号溝と併走し、第3a、3b号溝と交差していた。

走向方向は概ね東→西で、調査区内での底面の落差は0.3mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長42m、幅0.8m、深さ0.2mであった。遺物は、検出できなかった。

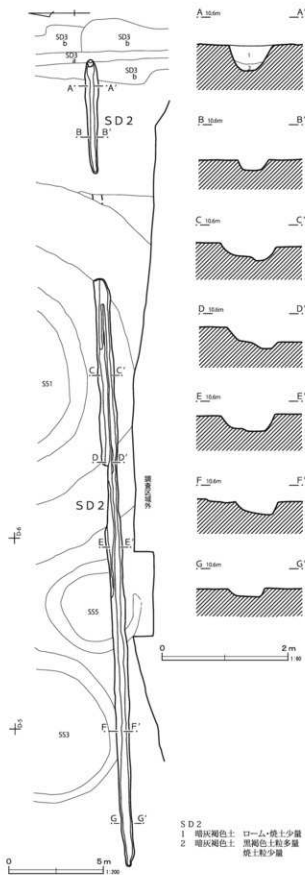
第3a号溝跡 (第28図)

B・C-8、D-8グリッドで検出された。第1、3b号溝と重複していた。第3b、4、6～8、10～12号溝と併走し、第1号溝と交差していた。

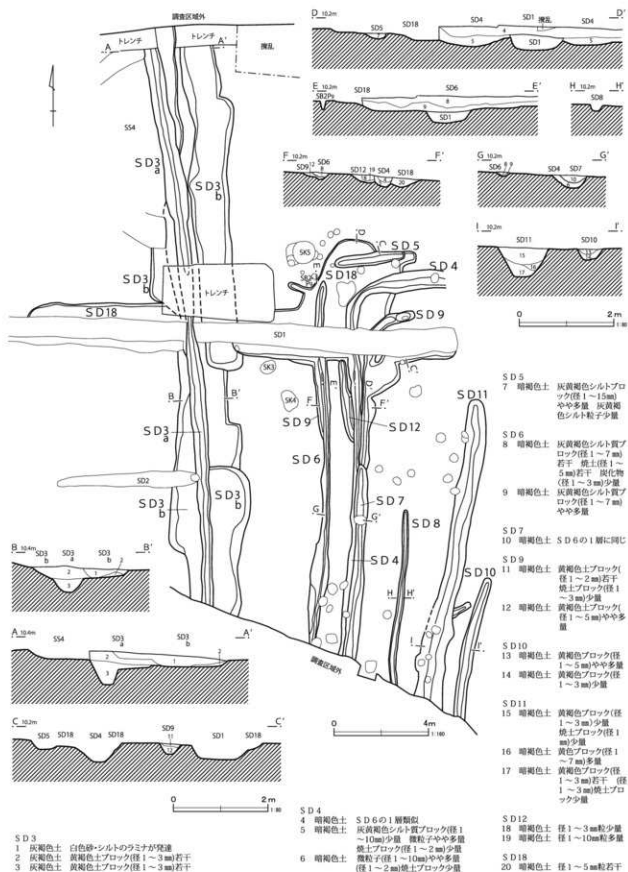
走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は0.1mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長23m、幅0.6m、深さ0.3mであった。覆土から陶器片を若干検出した。

第3b号溝跡 (第28図)

B・C-8、D-8グリッドで検出された。第1、3a、18号溝と重複していた。第3a、4、6～8、10～12号溝と併走し、第1号溝と交差していた。



第27図 第2号溝跡



第28図 第3-12-18号溝跡

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は0.1mであった。断面形態は浅い逆台形であった。調査区内での規模は全長23m、幅2.3、3.3m、深さ0.1mであった。覆土から陶器片を若干検出した。

第4号溝跡 (第28図)

C・D-9グリッドで検出された。第1、7、9、12、18号溝と重複していた。第3、6~8、10~12号溝と併走し、第1号溝と交差していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は0.1mであった。断面形態は、U字形であった。調査区内での規模は、全長19m、幅0.2、0.8m、深さ0.4mであった。板碑の破片を検出し

た。

第5号溝跡 (第28図)

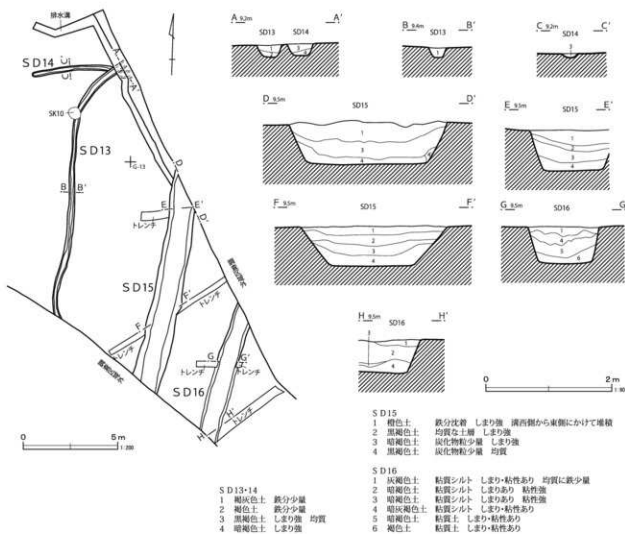
C-9グリッドで検出された。第18号溝と重複していた。第4号溝と併走していた。

走向方向は概ね西→東で、調査区内での底面の落差は0.1mであった。断面形態は、逆台形であった。調査区内での規模は、全長3m、幅0.5m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第6号溝跡 (第28図)

C・D・E-8・9グリッドで検出された。第1、18号溝と重複していた。第3、4、7~8、10~12号溝と併走し、第1号溝と交差していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の



第29図 第13~16号溝跡

落差は0.1mであった。断面形態はU字形であった。調査区内での規模は、全長15m、幅0.2~0.8m、深さ0.1mであった。遺物は、陶器片を若干検出した。

第7号溝跡 (第28図)

D・E-9グリッドで検出された。第4号溝と重複していた。第3、4、6、8、10-12号溝と併走していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は0.4mであった。断面形態はU字形であった。調査区内での規模は、全長8m、幅0.5m、深さ5cmであった。流れ込みの埴輪破片と陶器片を若干検出した。

第8号溝跡 (第28図)

D・E-9グリッドで検出された。第3、4、6~7、10-12号溝と併走していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は0.1mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長7m、幅0.3m、深さ0.7mであった。遺物は検出できなかった。

第9号溝跡 (第28図)

C-9グリッドで検出された。第1、4、18号溝と重複していた。第4号溝と併走し、第1号溝と交差していた。

走向方向は概ね南→北東で、調査区内での底面の落差は1cmであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長3m、幅0.4m、深さ5cmであった。遺物は検出できなかった。

第10号溝跡 (第28図)

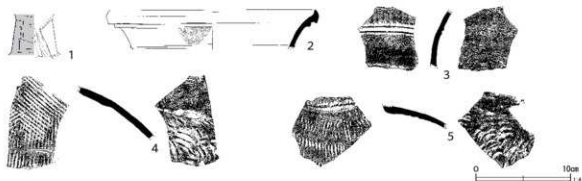
D・E-9グリッドで検出された。第3、4、6~8、11、12号溝と併走していた。

走向方向は概ね北→南で、調査区内での底面の落差は5cmであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長6m、幅0.5m、深さ0.2mであった。覆土から流れ込みの埴輪破片を若干検出した。

第11号溝跡 (第28図)

D・E-9グリッドで検出された。第3、4、6~8、10、12号溝と併走していた。

走向方向は概ね北→南で、調査区内での底面の



第30図 第1号溝跡出土遺物

第9表 第1号溝跡出土遺物観察表

図	種別	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	残存率 /%	焼成	色調	図版	備考
1	土師器	高坏	—	[4.7]	—	EGHL	45	普通	明赤褐	18.5	赤彩
2	須恵器	甕	(21.8)	[4.2]	—	EGI	5	普通	灰	18.5	外面波状文を施文
3	須恵器	甕	—	[5.5]	—	EGIK	破片	普通	灰	18.5	外面平行タタキ後部分的にカキ目
4	須恵器	甕	—	[6.2]	—	EGI	破片	良好	灰	18.5	外面波状文を2段施文
5	須恵器	甕	—	[2.5]	—	EGI	破片	普通	灰	18.5	外面平行タタキ後部分的にカキ目

落差は0.1mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長13m、幅0.8m、深さ0.6mであった。覆土から須恵器環の底部破片を若干検出した。

第12号溝跡 (第28図)

C・D-9グリッドで検出された。第4、18号溝と重複していた。第3、4、6～8、10、11号溝と併走していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は5cmであった。断面形態は緩やかなU字形であった。調査区内での規模は全長4m、幅0.4m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第13号溝跡 (第29図)

F・G-12グリッドで検出された。第14号溝と重複していた。第15、16号溝と併走し、第14号溝と交差していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の

落差は0.4mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長14m、幅0.3m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第14号溝跡 (第29図)

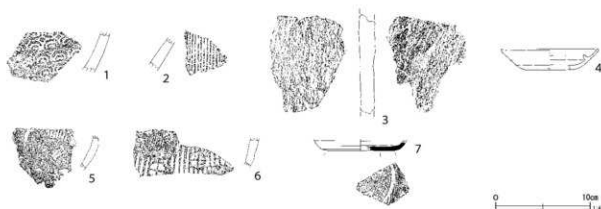
F-12グリッドで検出された。第13号溝と重複していた。第13号溝と交差していた。

走向方向は概ね西→東で、調査区内での底面の落差は0.1mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長4m、幅0.3m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第15号溝跡 (第29図)

G・H-13グリッドで検出された。第13、16号溝と併走していた。

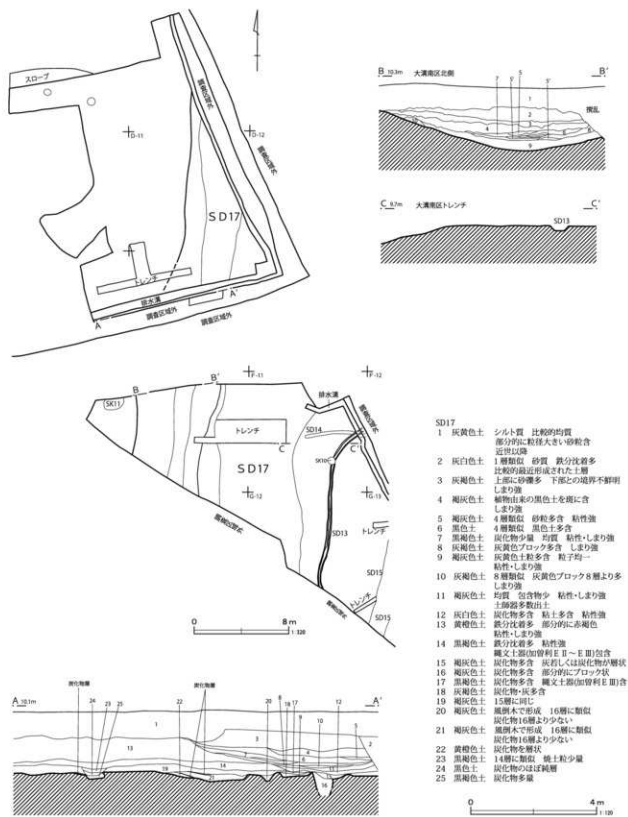
走向方向は概ね北→南で、調査区内での底面の落差は1cmであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長11m、幅1.3m、深さ0.6mであった。覆土から流れ込みの埴輪破片を若干検出した。



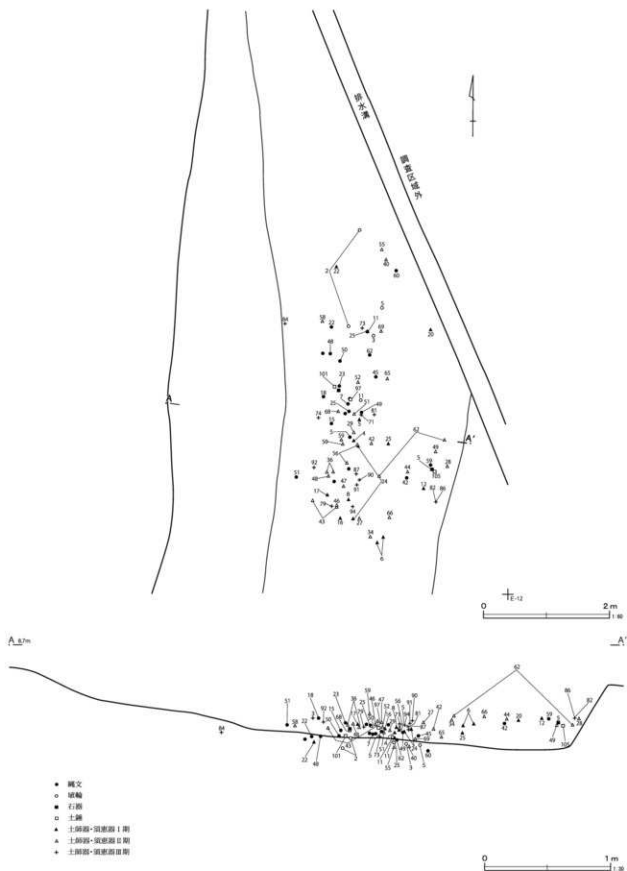
第31図 第3～11号溝跡出土遺物

第10表 第3～11号溝跡出土遺物観察表

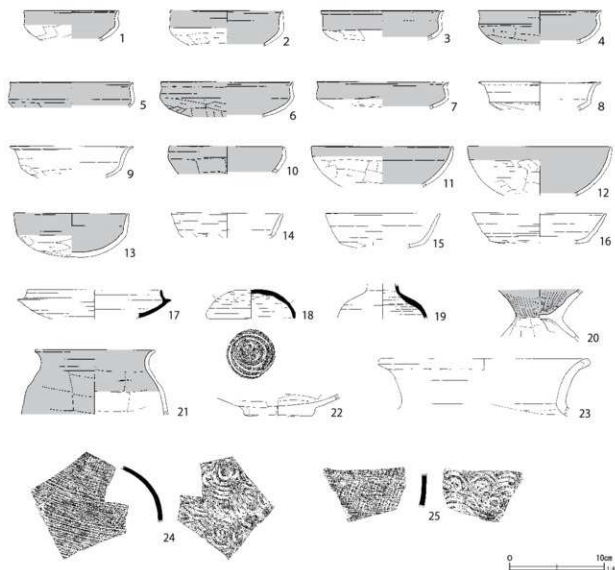
図	種別	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	残存率 %	焼成	色調	図版	備考
1	陶器	鉢	—	—	—	EGH	破片	普通	暗赤	185	
2	陶器	すり鉢	—	—	—	EK	破片	良好	黄白	185	
3	石製品	板碑	10.3	8.5	1.7	—	—	—	深緑	185	法量は、長さ・幅・厚さの順
4	陶器	灯明皿	10	2.2	5.2	G	20	良好	内外暗褐色	185	
5	陶器	甕	—	—	—	EGI	破片	普通	灰黄褐	185	在地産 外面タタキ目
6	陶器	甕	—	—	—	EGI	破片	良好	にぶい褐	185	常滑 外面□に十字の刻印
7	須恵器	環	—	1.2	(7.2)	HUK	20	良好	灰	185	



第32図 第17号溝跡



第33图 第17号满迹遗物出土状况



第34図 第17号溝跡出土遺物(1)

第16号溝跡(第28図)

G・H-13グリッドで検出された。第13、15号溝と併走していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は0.1mであった。断面形態は逆台形であった。調査区内での規模は、全長7m、幅1m、深さ0.5mであった。覆土から流れ込みの埴輪破片を若干検出した。

第17号溝跡(第32～38図)

C-11、D～G-11～12グリッドで検出された。調査時には大溝と呼称したが、報告時に第17号溝と改称した。重層関係は認められなかった。第13

号溝と併走していた。

走向方向は概ね南→北で、調査区内での底面の落差は0.2～0.4mであった。断面形態は極めてゆるやかなU字形であった。調査区内での規模は、全長16m、幅4～10m、深さ0.2～0.4mであった。人為的に掘削された溝か、自然の流路か明確には判断できなかったが、調査時の所見では、自然の流路である可能性が高いとされていた。

覆土中には、大量の遺物が含まれていたが、概ね4時期に分けることができた。

最も古い遺物群は縄文土器で、時期は縄文時代中期から後期のものであった。次ぎに古いものは、

第11表 第17号溝跡出土遺物観察表(1)

図	種別	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	残存率 /%	焼成	色調	図版	備考
1	土師器	坏	(10.0)	[3.2]	—	EGHIK	15	普通	にぶい褐	19-1	赤彩口縁内面沈線痕跡
2	土師器	坏	(12.0)	[3.7]	—	EGHIL	10	普通	にぶい橙	19-2	赤彩
3	土師器	坏	(13.0)	[3.2]	—	EGHIK	30	普通	にぶい橙	19-3	赤彩
4	土師器	坏	(13.0)	[3.5]	—	EGHI	10	普通	にぶい黄橙	19-4	赤彩
5	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	—	EGI	10	普通	にぶい黄橙	19-5	赤彩
6	土師器	坏	(14.0)	[3.7]	—	EGHIL	20	普通	褐	19-6	赤彩
7	土師器	坏	(14.0)	[2.8]	—	EHIK	10	普通	にぶい黄橙	19-7	赤彩
8	土師器	坏	(13.0)	[3.0]	—	EGI	30	普通	にぶい黄褐	19-8	
9	土師器	坏	(13.0)	[3.3]	—	EGHIJK	15	普通	にぶい黄橙	19-9	
10	土師器	坏	(12.0)	[2.9]	—	EGK	15	普通	にぶい黄橙	19-10	赤彩
11	土師器	坏	(15.0)	[4.3]	—	CEHIK	20	普通	にぶい橙	20-1	
12	土師器	坏	(15.2)	[5.2]	—	AEHIK	15	普通	にぶい橙	20-2	赤彩
13	土師器	坏	(12.0)	4.6	—	ACEHIK	25	良好	浅黄	20-3	
14	土師器	坏	(11.8)	[2.6]	—	EGHI	10	普通	にぶい黄橙	20-4	
15	土師器	坏	(12.0)	[3.7]	—	EGIK	15	普通	灰黄褐	20-5	
16	土師器	坏	(14.0)	[3.2]	—	CEGHI	15	普通	にぶい黄橙	20-6	
17	須恵器	坏	(14.0)	[3.0]	—	EGUJ	15	普通	灰	20-7	外面底部に自然釉
18	須恵器	坏	9.1	3.0	—	EGI	100	良好	灰	20-8	底面転へラ
19	須恵器	小型壺	—	[3.8]	—	EI	15	良好	灰	20-9	肩部外面、頸部内面に自然釉
20	土師器	高坏	—	5.5	—	ACEHIK	80	普通	橙	20-10	
21	土師器	小型壺	(12.6)	[6.8]	—	ECHIK	10	普通	にぶい黄褐	21-1	赤彩
22	土師器	壺	—	[2.3]	7.2	EGI	100	普通	明褐	—	
23	土師器	甕	(21.9)	[6.1]	—	EGIK	10	普通	にぶい黄	21-2	
24	須恵器	甕	—	[8.7]	—	EGIK	破片	普通	灰	—	
25	須恵器	甕	—	[5.4]	—	EGIK	破片	普通	灰	—	

古墳時代後期の土師器、須恵器である。続いて8世紀後半の須恵器を中心とした土器群、更に9世紀前半の須恵器を中心とした土器群が見られた。なお、中世から近世にかけての陶器類は、覆土上層から表土にかけて検出されたので、グリッドで取り上げた遺物とともに報告した。

特筆されることは、前述した4時期の遺物群が、層位的に検出されたのではなく、ほとんど分離することが可能なほどまとまって出土したことである。古代の大規模な水田開発に伴った、廃絶される溝への廃棄物の一括投棄と考えられる。

以下に第17号溝跡の遺物説明を記す。なお、縄文土器については、第1節第1項のグリッド出土縄文土器の中に示した。

第33図は古墳時代を中心とした土器群である。

1～16は土師器坏である。1～9はいわゆる比企型の坏であり、赤彩と口唇部内面の沈線が特徴

的である。いずれも比較的新しいものである。10～13は模倣坏であるが、いずれも赤彩されており、比企型坏の影響下で製作されたものであろう。14～16は有段坏で、14は赤彩されている。

17、18は須恵器坏であり、形態の特徴から時間差が見られる。19は小型の壺である。

20は赤彩須恵器を持つ土師器であり、高坏かと考えられる。21～23は土師器の甕である。

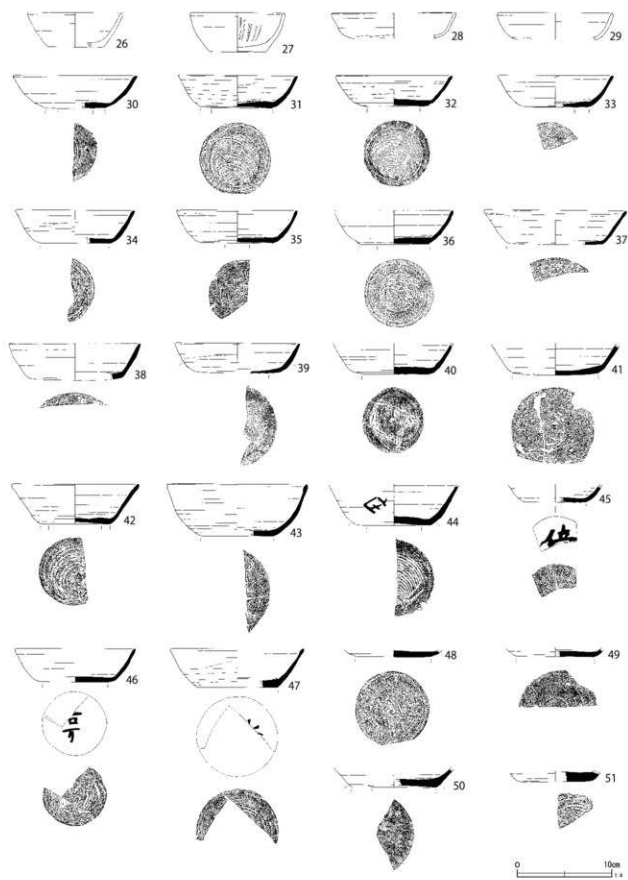
24、25は須恵器甕の胴部破片である。

第34、35図は、8世紀後半の土器群である。

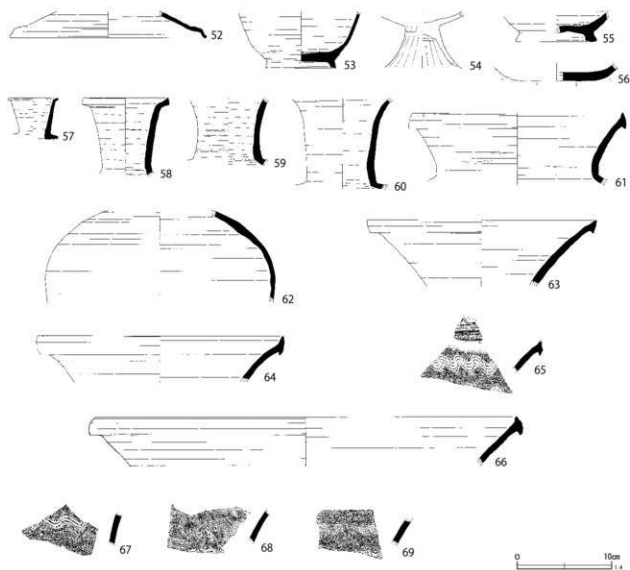
26～29は土師器坏である。27の内面には放射状の暗文が認められた。

30～51は須恵器坏であり、多くの胎土にはいわゆる白色針状物質が含まれており、南比企産であると考えられる。

44～47には墨書が認められた。44、45、47は判読できなかった。46は「吉万」と考えた。



第35图 第17号清跡出土遺物(2)



第36図 第17号溝跡出土遺物（3）

52は須恵器環の蓋、53は須恵器の高台付碗、54は土師器の高環である。

55、57～60、62は須恵器の瓶、56は須恵器環、61、63～69は須恵器の甕である。

36図に9世紀代の土器群を示した。

70は土師器環、71～91、93、94は須恵器環類である。須恵器の環類はいずれの胎土にもいわゆる白色針状物質が認められ、南比企産であると考えられる。82～84、89には墨書が認められた。

82は「万」、83は胴部、底部共に「玉」、84は内面が「長」、外面が「貴」、89は判読できなかった。

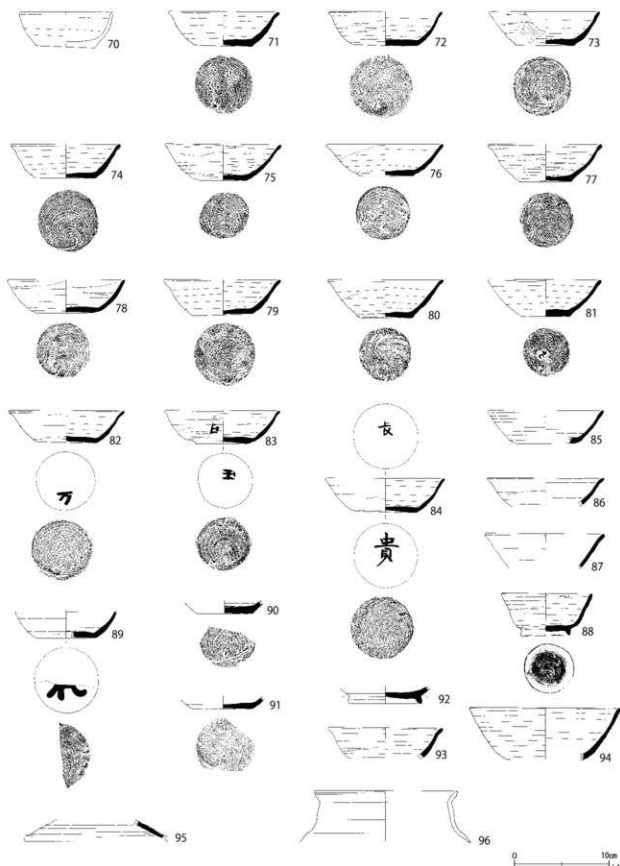
92は灰釉陶器の碗、95は須恵器蓋、96は土師器甕である。第17号溝からは、土鍾も10点出土した。これらは全て土師質である。

第18号溝跡（第28図）

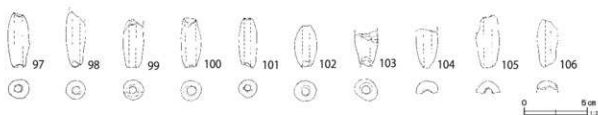
C-8・9、D-9グリッドで検出された。第1、3～7、9、12号溝と重複していた。面的に広がっており、走向方向は不明瞭であった。調査区内での底面の落差も不明瞭であり、断面形態は浅い皿形であった。調査区内での規模は、全長18m、幅10m、深さ0.2mで、遺物は検出できなかった。

第12表 第17号溝跡出土遺物観察表(2)

図	種別	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	残存率 /%	焼成	色調	図版	備考
26	土師器	坏	(10.0)	3.6	(6.0)	AHK	20	普通	橙	213	
27	土師器	坏	(10.0)	4.1	(6.0)	AH	20	普通	橙	214-5	
28	土師器	坏	(13.0)	2.8	—	AHK	20	普通	橙	—	
29	土師器	坏	(12.0)	(2.8)	—	CEI	10	普通	にぶい・橙	216	
30	須恵器	坏	(12.8)	[3.5]	(6.2)	EGU	25	普通	灰白	217	糸切後回転ヘラ比
31	須恵器	坏	12.5	3.4	7.6	EGUK	70	良好	灰	218	糸切後回転ヘラ比
32	須恵器	坏	12.4	3.2	7.2	EJ	85	良好	灰	219	糸切後回転ヘラ比
33	須恵器	坏	(12.0)	[3.3]	(7.0)	EGHJ	20	普通	灰	214-9	糸切後回転ヘラ比
34	須恵器	坏	(12.4)	[3.5]	(7.7)	EGJK	30	普通	灰	221	糸切後回転ヘラ 体外面積土痕 比
35	須恵器	坏	(12.7)	3.4	(7.6)	EGU	45	普通	灰	222	糸切後回転ヘラ 口縁外面積土痕 比
36	須恵器	坏	(12.4)	3.6	7.4	EGJ	60	良好	灰	223	糸切後回転ヘラ比
37	須恵器	坏	(15.0)	[3.6]	(10.3)	EGJK	20	普通	灰	224	糸切後回転ヘラ比
38	須恵器	坏	(13.8)	[3.8]	—	EGUK	65	普通	灰白	225	糸切後回転ヘラ比
39	須恵器	坏	(13.2)	[3.1]	(9.1)	EGU	40	普通	灰	226	糸切後回転ヘラ 体下部回転ヘラ 比
40	須恵器	坏	—	[3.3]	6.9	EGU	100	普通	灰	227	糸切後回転ヘラ比
41	須恵器	坏	—	[3.4]	(9.0)	EGK	50	普通	灰白	228	糸切後回転ヘラ
42	須恵器	坏	(13.2)	4.2	7.3	EGU	45	普通	灰	229	糸切後回転ヘラ比
43	須恵器	坏	(14.6)	[5.5]	(7.6)	EJK	30	普通	灰	231-0	糸切後回転ヘラ比
44	須恵器	坏	—	[4.4]	(8.0)	EGHK	30	普通	灰黄	231-2	糸切後回転ヘラ 体部外面黒書
45	須恵器	坏	—	[1.9]	(6.6)	EGJK	20	普通	灰	233-4	糸切後回転ヘラ 底部外面黒書 比
46	須恵器	坏	(12.5)	3.5	6.8	EGU	45	普通	灰白	235-6	糸切後回転ヘラ 底部外面黒書 比
47	須恵器	坏	(13.8)	4.1	(8.5)	EGU	30	普通	灰	237-8	糸切後回転ヘラ 底部外面黒書 比
48	須恵器	坏	—	[0.8]	8.0	EGU	95	普通	灰	—	糸切後回転ヘラ比
49	須恵器	坏	—	[1.0]	(8.2)	EGJL	45	普通	灰白	—	糸切後回転ヘラ比
50	須恵器	坏	—	[2.2]	(8.8)	EGU	20	普通	灰	239	糸切後回転ヘラ 底内面積土痕 比
51	須恵器	甕	—	[1.2]	(8.0)	EGU	20	不良	にぶい・橙	—	糸切後未調整
52	須恵器	坏蓋	—	[2.8]	(20.3)	EGU	10	良好	灰	231-0	比
53	須恵器	高白付坏?	—	[6.0]	7.4	EGK	60	普通	灰	241	糸切後未調整 下部粘土輪積み痕
54	土師器	高坏	—	6.0	—	ACEHI	40	普通	にぶい・黄褐	242	
55	須恵器	長頸瓶	—	[3.3]	(8.6)	EGJK	45	普通	灰	243	糸切後未調整 比
56	須恵器	斡?	—	[1.9]	(8.0)	EGHK	25	普通	黄灰	—	
57	須恵器	平瓶	5.1	[4.5]	—	EGK	85	普通	灰白	244	
58	須恵器	長頸瓶	8.9	[8.3]	—	EGK	100	普通	黄灰	245	
59	須恵器	長頸瓶	—	[7.1]	—	EGK	40	普通	灰	246	
60	須恵器	長頸瓶	—	[9.6]	—	EGKL	70	普通	灰	247	
61	須恵器	甕	(22.0)	[7.6]	—	EGKL	30	普通	灰白	248	内外面粘土輪積み痕
62	須恵器	瓶	—	[9.8]	—	EGK	5	普通	灰	—	
63	須恵器	甕	(24.0)	[7.0]	—	EGK	15	普通	黄灰	249	
64	須恵器	甕	(26.0)	[4.9]	—	EGU	15	普通	灰	241-0	比
65	須恵器	甕	—	[5.1]	—	EGJK	破片	普通	灰	251	比
66	須恵器	甕	(44.2)	[5.2]	—	EGK	破片	普通	灰	252	
67	須恵器	甕	—	[5.3]	—	EGU	破片	普通	灰	—	比
68	須恵器	甕	—	[5.6]	—	EGK	破片	普通	灰	—	
69	須恵器	甕	—	[4.4]	—	EGJK	破片	普通	灰	—	



第37图 第17号满跡出土遺物(4)



第38図 第17号溝跡出土遺物(5)

第13表 第17号溝跡出土遺物観察表(3)

図	種別	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	残存率 /%	焼成	色調	図版	備考
70	土師器	坏	10.0	3.7	6.2	AHK	95	普通	橙	25-3	
71	須恵器	坏	11.6	3.6	6.2	EGHJ	100	普通	にぶい橙	25-4	糸切後未調整 底「+」又は「×」刻書比
72	須恵器	坏	11.9	3.6	6.8	EJK	75	良好	灰	25-5	糸切後未調整 比
73	須恵器	坏	11.7	3.6	6.3	EGHJ	80	普通	浅黄	25-6,7	糸切後未調整 底外面黒書 比
74	須恵器	坏	11.5	3.6	6.5	EGHJ	75	普通	にぶい橙	25-8	糸切後未調整 底「+」又は「×」刻書比
75	須恵器	坏	12.0	3.8	5.0	EGJ	75	普通	灰	25-9	糸切後未調整 比
76	須恵器	坏	12.3	3.4	5.9	EGJ	75	普通	灰白	25-10	糸切後未調整 体外面積上痕 比
77	須恵器	坏	11.8	4.0	5.8	EGJ	95	普通	灰	26-1	糸切後未調整 比
78	須恵器	坏	12.2	3.5	6.2	EJK	80	良好	灰	26-2	糸切後未調整 比
79	須恵器	坏	12.3	3.7	6.4	EGJ	100	普通	にぶい橙	26-3	糸切後未調整 比
80	須恵器	坏 (12.0)	4.0	5.6	EGJK	45	普通	黄灰	—	糸切後未調整 体外土積上痕 比	
81	須恵器	坏	11.9	3.9	5.2	EHIJ	80	普通	灰	26-4	糸切後未調整 比
82	須恵器	坏 (12.1)	3.4	6.2	EGJ	70	普通	灰	26-5-7	糸切後未調整 底外面黒書 比	
83	須恵器	坏 (12.1)	3.5	5.8	EGJK	70	良好	灰	26-8-9	糸切後未調整 底、体外面黒書 比	
84	須恵器	坏	12.5	3.6	6.8	EGJ	75	普通	灰	27-1-3	糸切後未調整 底内外面黒書 比
85	須恵器	坏 (12.0)	[3.5]	(6.0)	EGJ	20	普通	灰	26-10	糸切後未調整 比	
86	須恵器	坏 (12.1)	[3.0]	—	EGJK	50	普通	灰	27-4	体外面積上痕 比	
87	須恵器	坏 (12.4)	[3.7]	—	AEGIKL	10	不良	灰白	—		
88	須恵器	高台付坏	9.5	4.5	5.1	EI	70	良好	灰	27-5	
89	須恵器	坏	—	[3.0]	(6.8)	EGHJ	30	普通	灰白	27-6-7	糸切後未調整 底外面黒書 比
90	須恵器	坏	—	[1.4]	(6.0)	EGJ	60	良好	灰	—	糸切後未調整 比
91	須恵器	坏	—	[1.4]	6.3	EGJ	80	普通	灰	—	糸切後未調整 比
92	灰釉陶器	坏	—	[1.9]	7.5	EIK	60	良好	灰白	—	トチン跡
93	須恵器	坏 (12.0)	[3.3]	—	EGJ	25	普通	灰	27-8	比	
94	須恵器	罍 (16.0)	[5.4]	—	GI	15	不良	浅黄	27-9	内外面付着物	
95	須恵器	蓋	—	[1.9]	—	EGJ	10	普通	灰	—	比
96	土師器	甕 (15.0)	[5.6]	—	ACHIK	10	普通	明赤褐	27-10		

第14表 第17号溝跡出土遺物観察表(4)

図	長さ /cm	幅 /cm	重さ g	残存率 /%	焼成	色調	図版	図	長さ /cm	幅 /cm	重さ g	残存率 /%	焼成	色調	図版
97	6.4	2.5	29.11	100	普通	淡褐	30-2	102	5.0	2.6	21.95	90	普通	淡褐	30-2
98	[6.5]	2.3	21.89	85	普通	淡褐	30-2	103	[4.1]	2.7	17.43	50	普通	淡灰	30-2
99	[5.7]	2.4	20.09	70	普通	淡黄褐	30-2	104	[4.6]	2.5	13.56	25	普通	淡灰	30-2
100	5.9	2.4	23.86	100	普通	淡黄褐	30-2	105	[6.2]	2.7	17.69	50	普通	淡灰	30-2
101	5.3	2.2	21.98	100	普通	淡灰	30-2	106	[5.6]	[2.5]	8.46	45	普通	淡褐	30-2

(3) 土壌 (第39図)

調査区内からは、11基の土壌を検出した。遺物はほとんど検出できず、明確な時期決定はできなかったが、覆土の状況から、縄文時代や古墳時代のものではなく、古代から中世にかけてのものであると考えた。第9号土壌からは、埴輪破片が出土したが、流れ込みと考えられる。

第1号土壌 (第39図)

C-4・5グリッドの北西から検出された。軸方向は、N-89°-Eであった。平面形態は長方形、断面形態は深い皿形であった。規模は、長軸1.5m、短軸0.7m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第2号土壌 (第39図)

C-6グリッドの北西から検出された。軸方向は、N-4°-Wであった。平面形態は形態は隅丸方形で、断面形態は逆台形であった。規模は、長軸1.1m、短軸0.2m、深さ0.7mであった。流れ込みの埴輪破片が出土した。

第3号土壌 (第39図)

C-8グリッドの中央から検出された。軸方向は、N-62°-Eであった。平面形態は楕円形、断面形態は皿形であった。規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第4号土壌 (第39図)

D-8グリッドの中央から検出された。ビット3本と重複していた。軸方向は、N-39°-Wであった。平面形態は楕円形、断面形態は瓢箪形であった。規模は、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第5号土壌 (第39図)

C-8グリッドの北東から検出された。ビット数本と重複していた。平面形態は円形、断面形態は深いU字形であった。規模は長軸1.0m、短軸0.9m、深さ1.2mであった。遺物は検出できなかった。

第6号土壌 (第39図)

B-6グリッドの北西から検出された。軸方向

は、N-87°-Wであった。平面形態は隅丸長方形、断面形態は皿形であった。規模は、長軸1.4m、短軸0.6m、深さ0.1mであった。遺物は検出できなかった。

第7号土壌 (第39図)

B-6グリッドの北西から検出された。軸方向は、N-38°-Wであった。平面形態は円形、断面形態は椀形であった。南東側にテラスが認められた。規模は、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mであった。遺物は検出できなかった。

第8号土壌 (第39図)

D・E-4グリッドの西から検出された。軸方向は、N-52°-Eであった。平面形態は長楕円形、断面形態は船底形であった。規模は、長軸2.7m、短軸0.8m、深さ0.2mであった。遺物は検出できなかった。

第9号土壌 (第39図)

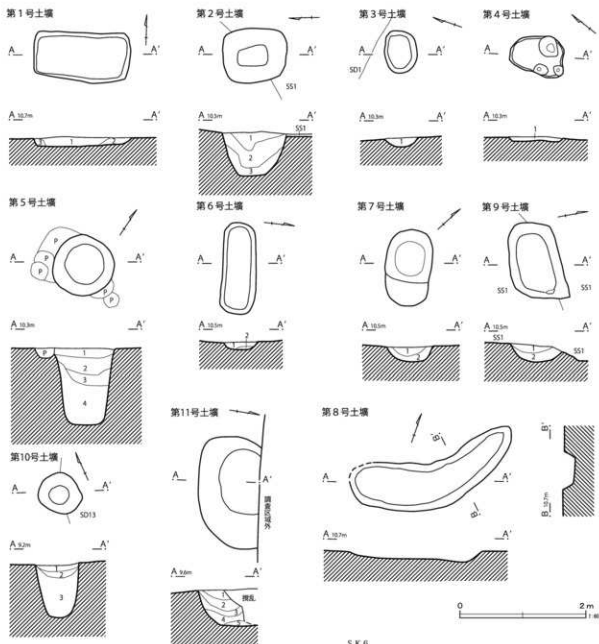
C-6グリッドの北西から検出された。軸方向は、N-88°-Eであった。平面形態は隅丸長方形、断面形態は椀形であった。規模は、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.3mであった。小さい埴輪の破片を検出したが、土壌に伴うものではないと判断したので、遺構に伴わない他の埴輪と共に一括して、グリッド出土として掲載した (44頁21)。

第10号土壌 (第39図)

F-12グリッドの南東から検出された。軸方向は、N-21°-Wであった。平面形態は円形、断面形態はU字形であった。規模は長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.9mであった。遺物は検出できなかった。

第11号土壌 (第39図)

F-10グリッドの南東から検出された。北側半分は、調査区外に存在していた。軸方向は、N-82°-Eであった。平面形態は楕円形、断面形態は椀形であった。規模は、長軸1.8m、短軸0.9m、深さ0.6mであった。北側は攪乱を受けていた。遺物は検出できなかった。



- S K 1**
 1 黒褐色土 黄褐色土若干
 2 暗褐色土 黄褐色土+ブロック多量
 3 暗褐色土 黄褐色土若干 黄褐色ブロック多量
- S K 2**
 1 黒褐色土 黄褐色ブロック径1~5mmやや多量
 2 黒褐色土 黄褐色ブロック径1~3mm少量 F A 抜け込みか
 3 暗灰黄褐色土 黄褐色ブロック径1~7mmやや多量 黄褐色粒子若干
- S K 3**
 1 黒褐色土 黄褐色ブロック径1~5mm若干 焼土ブロック径1~2mm少量
- S K 4**
 1 暗褐色土 黄褐色ブロック径1~5mmやや多
- S K 5**
 1 灰褐色土
 2 灰褐色土 黄白色土+橙土含
 3 黄白色土
 4 暗灰黄褐色土

- S K 6**
 1 黒褐色土 黄褐色ブロック径1~2mm少量
 2 黒褐色土 黄褐色ブロック径1~5mmやや多量

- S K 7**
 1 黒褐色土 黄褐色ブロック径1~3mmやや多量
 焼土ブロック径1~3mm少量
 2 黒褐色土 黄褐色ブロック径1~7mm若干

- S K 9**
 1 黒褐色土 黄褐色ブロック若干
 2 黒褐色土 黄褐色ブロック+粘土多量

- S K 10**
 1 黒褐色土 包含物少量 均等 しまり強
 2 暗褐色土 炭分多量 しまり少
 3 灰褐色土 粘土を炭粒に含 炭分多量 しまり強

- S K 11**
 1 暗灰褐色土 粘質土 しまり粘性強 焼土粒少量
 2 暗褐色土 粘質土 しまり粘性強 焼土粒少量
 3 暗褐色土 粘質土 しまり粘性強 炭化物少量
 4 黒褐色土 粘質土 しまり粘性強 炭化物少量
 5 灰褐色土 粘質土 しまり粘性強 灰褐色土ブロック主体

第39図 第1~11号土壌

(4) ビット群 (第40図)

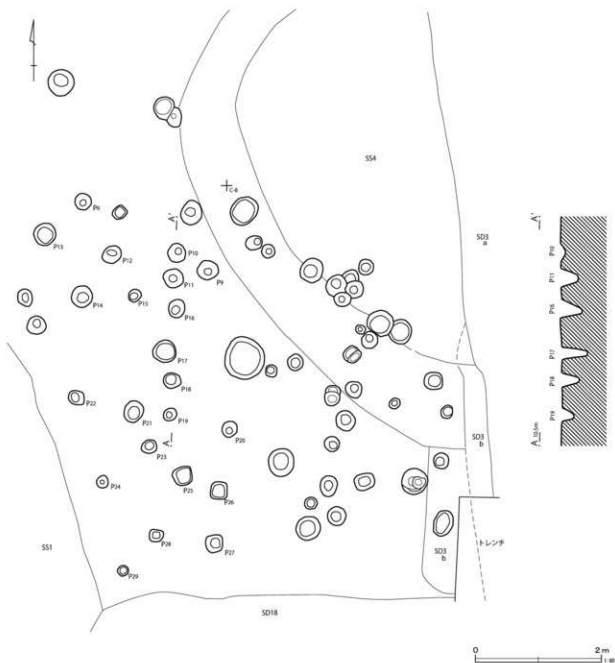
C-7・8グリッド周辺から、ビットのまとまりを検出した。時期を確定することができる遺物は、見いだせなかった。覆土の状況から、古代から中世にかけて埋没したものと考えられた。

配列の規則性は、明確には見いだせなかったが、南北方向に並ぶ2列か、あるいは、中央のやや大きなビットを囲む、平行四辺形にとらえることも

可能である。また、単純にやや東に傾いた長方形の配列が重畳している可能性も考えられる。

想定できる遺構としては、中世の小型の家屋などがあげられる。

比較的直線に近い配列が見られた方向について、断面図を掲げた。深さは一律ではなく、それぞれ異なっていた。



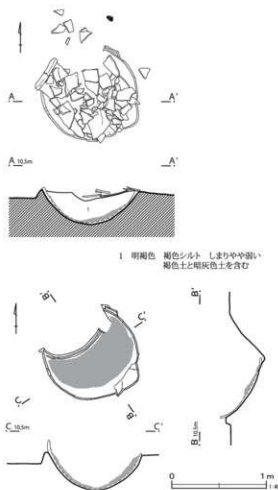
第40図 第1号ビット群

(5) 常滑埋甕 (第41～42図)

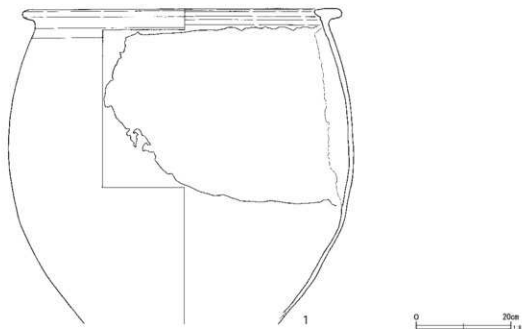
常滑の埋甕が、B-6グリッドから出土した。口縁部がやや低い位置で傾いた横位で検出された。口端部の面の傾きや、胴部形態の特徴から、19世紀頃のものであると考えられる。体部下半の2カ所に拳大の緩やかな窪みが見られた。

上半部の片側と底部が欠失しており、内面の最大径より上半分には、灰白色の付着物が見られた。この付着物を分析したところ、主成分はCaCO₃(炭酸カルシウム)と砂だった。

甕の体部外面には、灰色の変色範囲が斜めに見られ、内面の付着物の位置とも一致するので、この内外面の特徴は、甕が埋められた後に形成されたものであると考えられる。この変色と付着物の範囲が地表下にあり、それ以外の部分が地表面に露出していたと仮定すると、欠失した部位は、地表面に露出していた部分である。畑の近くに埋められていた、農業用の肥料が入れられた甕が、何らかの理由によって移動が必要となり、掘り起こす最中に破損してしまい、そのままその地点に投棄された可能性を想定した。



第41図 常滑埋甕出土状況



第42図 常滑埋甕

(6) グリッド出土遺物 (第43～47図)

1. 埴輪 (第43～46図)

調査区内から出土した埴輪について、個別遺構への帰属が明らかな、古墳跡出土のものについては前述の各遺構の中でそれぞれ報告したが、ここではそれ以外のものについて、一括して掲載した。この中には、表土を除去する際に検出したものや、遺構確認前にグリッドで取り上げたもの、古墳時代以降の土壌や溝跡から出土したもの等が含まれている。また、平成19年に文化財課が実施した試掘時の際に出土したものと併せて報告した。円筒埴輪を第42、43図に、形象埴輪を第44図に示した。なお、B種ヨコハケが見られる埴輪は実測図を掲載したが、拓影についても第45図に示した。

1～5は比較的大型の破片である。この中で1～4はいわゆるB種ヨコハケが確認できるものであり、調査区内から出土した埴輪の中では、最も古い一群である。帰属する遺構は検出できなかったが、これらの埴輪が帰属する可能性がある古墳として、調査区の北側に隣接する白山古墳をあげることができる。

1は口縁部の破片で試掘時に取り上げたものである。緩やかに外反する口縁部で、外面には赤彩された痕跡が微かに残り、ヘラ記号の一部が確認される。2は胴部の破片であり、円形透孔の一部が見られる。外面調整は1次タテハケの後、2次調整にB種ヨコハケ(一瀬2009)を施す。突帯は突出が強く、貼り付け後ナデ調整を丁寧に施す。3、4は底部から第2段にかけての破片であり、第2段外面に2次調整のB種ヨコハケを施す。透孔は円形と推定される。5は第1段の破片であり、外面にタテハケを施す。底径は12.2cmと小さく、やや新しい様相を示す。3、5は基部をR接合する。また、3、5の底部には楕円痕跡が見られるが、4の底部は平坦面となっており、楕円状の痕跡は認められない。

6、7は口縁部の破片である。それぞれ、第10

号溝跡、第7号溝跡から検出した。いずれも極めて軟質であり、器面の風化が著しく、調整が不明瞭であった。6は口縁部が直線的に開き、器内が厚く、中型品になろうか。7は口縁部が緩やかに外反する。

8～24は、胴部の破片である。

8～16は、いずれも溝跡から出土した。9、14は第1号溝跡から、8は第4号溝跡から、12、16は第7号溝跡から、10、11、13、15は第17号溝跡からそれぞれ出土した。

8、10は極めて軟質であり、著しい風化を受けていた。8～10、14には、円形透孔の一部が見られた。12、14は須恵質であり、硬質の焼き上がり呈していた。12の内面には、粘土帯の積み上げ単位の境界が明瞭に認められた。

13の突帯には板押玉の痕跡と工具の止め跡が認められ、やや上方に向けての変形が観察できた。他の破片よりも器内が厚い。15は突帯部分が残存したもので、須恵質であり突帯は特徴的な押さえによりM字状を呈していた。

16はやや軟質で器面の風化が著しかった。

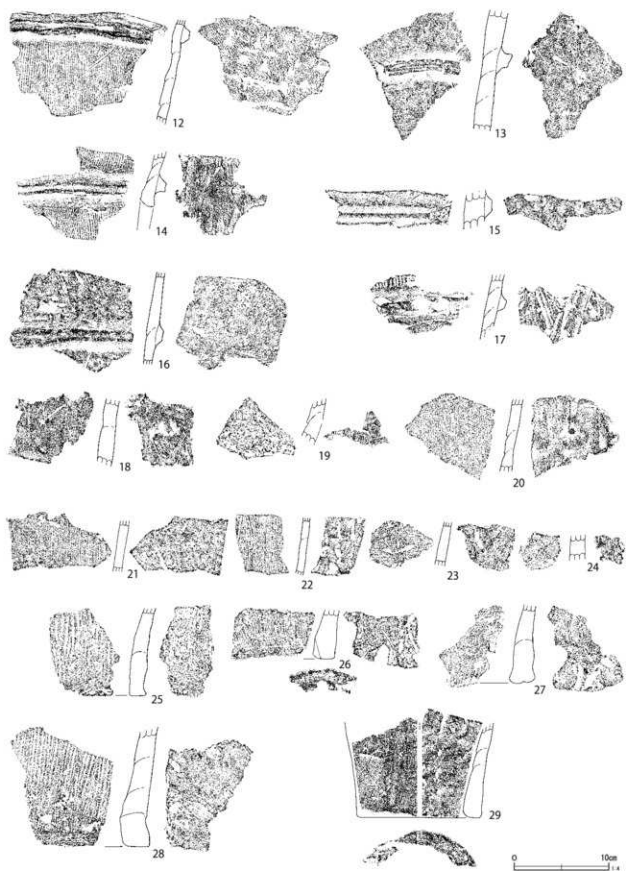
17、18は、C-3グリッドで取り上げた。いずれも比較的小さな破片であるが、出土した位置から第2号古墳跡に帰属する可能性が考えられる。17は突帯が一部剥落しており、剥落後の器面には、突帯を取り付ける際に施されたと考えられる、斜め左上がりの幅5mm、長さ2cm程度の楕円形の窪みが3cm程度の間隔で認められた。18は、基部に近い部分の破片である。

19、20、22～23は、いずれも溝跡から出土した。23は第4号溝跡から、22は第7号溝跡から、19は第16号溝跡から、20は第17号溝跡からそれぞれ出土した。

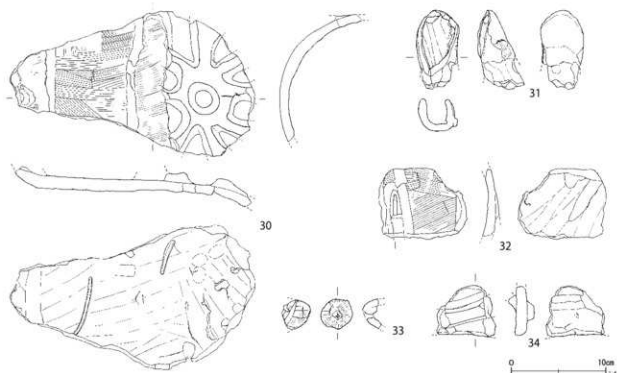
22の内面には積み上げ時の粘土帯の単位境界が明瞭に認められる。なお22は、器内が薄く湾曲も著しいため、形象埴輪の可能性も考えられる。23



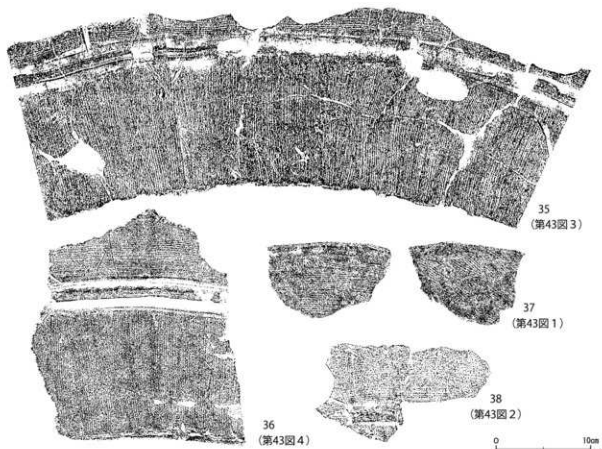
第43図 グリッド出土埴輪 (1)



第44図 グリッド出土埴輪 (2)



第45図 グリッド出土埴輪 (3)



第46図 埴輪拓影

第15表 グリッド出土埴輪観察表(1)

図	器種	口径 /cm	器高 /cm	底径 /cm	胎土	焼成	色調	残存 /%	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	図版	備考
1	円筒	—	—	—	AHJL	普通	橙	25	ココ 10	ナナメ 9	281	大関川試掘5レ② 赤彩外面ヘラ記号
2	円筒	—	—	—	EGHI	良好	橙	30	ココ 10	ナデ	281	大溝D-11G/a・4・13 透孔一部残存
3	円筒	—	[19.7]	16.6	EGHI	良好	橙	25	タテ・ココ	ナデ	282	大溝D-11G/a・19 基部R接合 基部幅5.9cm
4	円筒	—	(19.8)	—	CEGHI	良好	にぶい黄橙	30	タテ・ココ 10	ナデ	283	SD-1 No.13 透孔一部残存
5	円筒	—	[11.7]	12.6	AEGHI	良好	にぶい黄橙	70	タテ 9	ナデ	284	大溝D-11G/a・10 基部R接合 基部幅6.9cm
6	円筒	—	—	—	EGHI	普通	橙	—	ナデ	ナデ	285	SD-10 中型品
7	円筒	—	—	—	AEGH	普通	にぶい黄橙	破片	ナナメ 10	ココ 12	285	SD-7 器面風化顕著
8	円筒	—	—	—	AEGHI	普通	浅黄橙	破片	ココか	ナデ	285	SD-4 透孔一部残存
9	円筒	—	—	—	EGHI	普通	にぶい橙	破片	タテ 12~13	ココ・ナデ 10	285	SD-1 No.12 透孔一部残存
10	円筒	—	—	—	CEHI	不良	にぶい橙	破片	ココか	ナデ	285	大溝F-11G 器面風化 透孔一部残存
11	円筒	—	—	—	AEHI	普通	灰黄	破片	タテ 10	ナナメ 9	285	大溝D-11G/a・35
12	円筒	—	—	—	AEGI	良好	灰白	破片	タテ 12	ナナメ・ナデ 12	291	SD-7/a・2 須恵貫
13	円筒	—	—	—	AEGHIL	普通	にぶい橙	破片	ナデ	ナデ	291	大溝F-11G 突等押E痕
14	円筒	—	—	—	EGHIK	良好	にぶい橙	破片	タテ 10	ナデ	291	SD-1 No.3 須恵貫 透孔一部残存
15	円筒	—	—	—	EHK	良好	にぶい黄橙	破片	ココ・ナデ	ナデ	291	大溝F-11G 須恵貫 断面M字形突帯
16	円筒	—	—	—	AEGHI	普通	浅黄橙	破片	ナナメ 9	ナナメ 9	291	SD-7/a・1 器面風化顕著
17	円筒	—	—	—	ACHIK	普通	にぶい黄橙	破片	タテ 5	ナナメ 5	291	C3G
18	円筒	—	—	—	AEHIK	普通	にぶい橙	破片	ナデ	ナデ	291	C3G 基部付近の破片
19	円筒	—	—	—	AEHIK	普通	にぶい赤褐	破片	タテ 9	ナデ	291	SD-16 外面器面剥落
20	円筒	—	—	—	EGHIK	良好	にぶい橙	破片	タテ 9	ナデ	291	大溝F-11G 器面風化 透孔一部残存
21	円筒	—	—	—	AEGH	普通	浅黄橙	破片	タテ 10	ナデ	292	SK/a・1 器面風化顕著
22	円筒	—	—	—	AEGH	普通	橙	破片	タテ 12	ナデ	292	SD-7 形埴輪の可能性あり
23	円筒	—	—	—	EGHI	普通	浅黄橙	破片	ココ 10	ナデ	292	SD-4 透孔一部残存 ココハケ静止痕
24	円筒	—	—	—	EHK	普通	浅黄橙	破片	ナデ	ナデ	292	SD-15 器面風化顕著
25	円筒	—	—	—	AGHI	普通	灰白	破片	ナナメ 5	ナデ	292	大溝D-11G/a・11 基部幅4.6cm
26	円筒	—	—	—	ACEGH	普通	浅黄橙	破片	タテ 11	ナデ	292	SK/a 器面風化顕著 基部幅5.3cm 内面棒状E痕あり
27	円筒	—	—	—	EGIL	良好	灰褐	破片	ナデ	ナデ	292	SD-4 須恵貫 底面棒状E痕
28	円筒	—	—	—	AGHI	普通	浅黄橙	破片	タテ 6	ナデ	292	大溝D-11G 基部幅3.6cm 底面平坦 底部下窪ナデ
29	円筒	—	—	—	AEHIK	普通	浅黄橙	25	タテ 11~12	ナデ	292	SK2 基部R接合 基部幅5.6cm

第16表 グリッド出土埴輪観察表(2)

図	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	図版	備考
30	馬 臀部	ABCEHK	良好	橙	ナデ・ハケメ	11~12	ナデ	A区東側 尻髯表現が良好に残る
31	馬 耳	AEGHI	普通	にぶい黄橙	ナデ・ハケメ	—	ナデ	SD1 (C7 G) 粘土板をU字形に折り曲げ 基部を挿入
32	馬 鞍橋・ミズオ	AEHIK	良好	にぶい橙	ハケメ	10	ナデ	SD1 (C7 G) 粘土組で鞍轡を表現する
33	馬 尻尾	EHK	良好	にぶい橙	ハケメ	9~10	ナデ	SD1 (C7 G) 粘土組の巻上による中空成形 須恵貫
34	不明	AEHIK	普通	赤褐	ナデ	—	ナデ	大溝D-11G 馬の下顎 手綱表現か

には透孔の一部がみられた。外面調整は2次調整のB種ヨコハケで静止痕が認められる。21は、第9号土壌から検出した。器面の風化が顕著であった。

25～29は基部の破片である。

27は第4号溝跡から、25、28は第17号溝跡から、29は第2号土壌から、26は第9号土壌からそれぞれ検出した。

25、27には底面棒状圧痕がみられ、28は底面が平坦であり、底部下端にはナデ調整が見られた。26は器面の風化顕著であり、内面に棒状圧痕が見られた。27は須恵質で極めて硬質な焼き上がり呈しており、外部表面は、亀裂が著しい。28は極めて軟質である。29もかなり軟質であり、基部の接合はR接合である。

30～34は形象埴輪の破片である。

30～33はいずれも馬形埴輪の破片であり、30は背部、31は耳部、32は鞍の居木および鎧紐、33は尻尾の一部である。胎土・焼成などの特徴から第1号古墳跡に伴う可能性が高い。

30は前輪、後輪などの鞍橋は剥落しているが、尻繫の表現が良好に見られた。環状の雲珠から後輪に3条の革帯が延びるほか、尻尾にも2条の革帯が延びる。さらに、杏葉を3方向に垂下する。杏葉の形状については不明である。内面には全体

にナデを丁寧に施し、沈線状の痕跡が2条認められた。

31では、粘土板をU字状に折り曲げて基部を細く成形し、挿入した痕跡が見られた。表面の調整に伴って移動した粘土は、ほとんど剥落しており、調整が不明瞭となっていた。

32は粘土紐を貼り付け、鎧を吊り下げる革帯の鎧紐を表現している。

33の尻尾は須恵質であり、粘土紐を巻き上げて、あるいは2枚の粘土板を組み合わせて中空の整形をしていた。

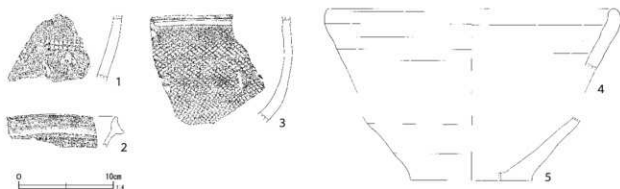
34は器種不明の形象埴輪であり、やや平坦で厚めの粘土板にやや曲線状の突帯を貼り付けている状況から、馬形埴輪の一部で、下顎部分に見られる手綱の表現である可能性が考えられる。胎土は深赤色を呈していた。

2. 中近世陶器 (第47図)

調査区内から出土した中近世陶器の中で、遺構に帰属しないものを一括して掲載した。

1、2、4、5は第17号溝跡の覆土上層から表土付近にかけて出土した。3は3-Gグリッドから取り上げた。

1は甕の胴部、2はすり鉢の口縁部であり、釉葉がかかっている。3は火鉢、4・5は鉢である。いずれも、あまり摩滅していなかった。



第47図 グリッド出土中世陶器

V 自然科学分析

1. 埋蔵付着物の理化学分析

はじめに

三竹遺跡B-6グリッドから検出した常滑埋蔵物の内部には、灰白色の付着物が見られた。この付着物の成分を同定することは、埋蔵の用途推定につながると思われたので、理化学的方法によって成分を分析した。

ここでは、試料に夾雑物が含まれていることが予め予想できたため、元素組成ではなく、化合物組成を調べた。

1 試料

整理室に保管されている、三竹遺跡B-6グリッドから出土した常滑埋蔵物の内面から灰白色の付着物の少量を採取し、メノウ製乳鉢を用いて粒感が無くなるまで粉砕した。

2 方法

化合物名を判定するため、X線回折を利用した。X線回折装置は、理学電気製RINT2100ultima+/pcを使用し、設定条件を表17に示した。なお、回折装置は石器の非破壊分析用に平行ビーム法に設定してあるため、設定を変えずに無反射試料板を用いて測定した。

3 回折結果の解析

X線回折の結果として得られたプロファイルを図48に示した。なお、プロファイルを見やすくするために、バックグラウンドを消去したものを示した。鉱物名同定のためにJADE6.0を使用し、回折線のデータベースはICDD-PDF DataSets 1-51 plus 70-89 Release 2001を利用した。

4 結果

回折結果とデータベースとの照合から、付着物に含まれる化合物として、quartzとcalciteを同定した。

第17表 X線回折装置の設定

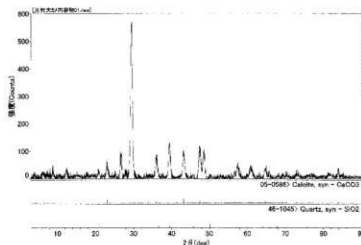
ターゲット: Cu	モノクロ受光スリット: なし
管電圧: 40 kV	走査モード: 連続
管電流: 40 mA	サンプリング幅: 0.02°
カウンタ: モノクロメータ: 固定	走査範囲: 3-90/°
カウンタ: シンチレーションカウンタ	積算回数: 1回
発散スリット: 0.5mm	スキャンスピード: 4°/min
発散制限スリット: 10mm	走査軸 2θ/θ°
散乱スリット: 解放	θオフセット: なし
受光スリット: 解放	光学系: 平行ビーム法

5 考察

検出した化合物の中で、quartzは当該遺物の埋没条件では地下水から再結晶して生成するとは考えがたいので、calciteの生成時か、あるいはその後の砂粒の混入である。

calciteは試料の主成分であり、CaCO₃である。一般的に自然界に存在するCaCO₃には、calciteとaragoniteの二つの構造が見られるが、生物起源のCaCO₃は、aragoniteであると言われている。今回検出した鉱物はcalciteであることから、被験試料は生物起源によって生成した沈殿ではないと考えやすい。

無生物的にCaCO₃の沈殿が生じる原因として考えられることは、農業用消石灰の利用であり、この水溶液から生じた沈殿であろう。



第48図 X線回折プロファイル

VI 調査のまとめ

1. 検出した遺構

今回の発掘調査で検出した遺構は、古墳時代後期の古墳跡5基、奈良時代以降の掘立柱建物跡2棟、溝跡19条、土壌11基、ピット群1、ピット50基、近世の常滑埋戻1基であった。また、遺構は検出できなかったが、縄文時代中期と後期の土器、石器が検出できた。以下で、概要を説明する。

縄文時代については、中期勝坂期末から加曾利EⅢ式期、および後期堀之内期の遺物を検出した。これらは、明確な遺構を伴うものではなかったが、土器がまとめて出土することや、風化がさほど進行していないことなどの状況から、周辺の自然堤防上に当該期の遺構が存在していると考えて良いであろう。荒川低地では、中期末から後期初頭にかけての遺跡密度が極めて低く、三竹遺跡の調査でも同様な傾向が認められた。この点については、調査区内の基本層序の検討から、当該期の大量の土砂堆積が認められたので、荒川の流路変遷の影響により、生活に適さない環境であったことが推定できた。

古墳時代前期では、低地の開発が著しく活発となり、荒川中流域では、集落が自然堤防上に出現しているが、三竹遺跡では、当該期の遺構や遺物は見いだせなかった。この点については、当該地域は荒川の downstream に相当し、入間川との合流点付近でもあり、当時の技術では未だ水の制御が困難であったか、あるいは調査区周辺が生産に使用され、居住域とは若干の距離があったかのいずれかが考

えられる。

これに続く古墳時代後期には、荒川低地の自然堤防上に古墳群が形成される傾向にある。古墳時代前期に本格的に開始された低地の開発は、古墳時代後期においてもますます生産性を高め、低地＝生産地、自然堤防＝集落＋墓という図式が固定化してきたと考えられる。

三竹遺跡でも、幅50m程度の自然堤防の高まりに円墳が5基築かれていた。その中の1基では周溝が二重に巡らされており、特異な形状であった。なお、調査区内で検出されたB種ヨコハネの円筒埴輪は、周辺の自然堤防上に調査区内で検出された古墳に比べて、より古い古墳が存在していることを示唆している。実態が明らかではない、白山古墳などがそれに該当する可能性がある。

低地の開発は、時代を経るに従って活発になって行くが、集落としては比較的小さな単位で、自然堤防上に営まれていたと考えられる。近年の発掘調査の成果からは、9世紀代に低地開発が一つの画期を迎えたと見ることができる。それは、排水系統の整備を基調としたより大規模な水田開発であろう。これに伴い、低地の自然堤防上の集落は周辺の台地上に移動したと考えられる。三竹遺跡第17号溝で検出した様々な時期の土器類が混在した一括投棄は、このよう集落の移動に伴う行為であったと考えてよいであろう。

以下では、各時期についてより詳しく検討した。

2. 縄文時代

(1) 出土遺物からみた周辺縄文遺跡との関係

三竹遺跡の調査では、勝坂式終末期、加曾利EⅡ式からEⅢ式、堀之内I式土器が出土した。三竹遺跡の周辺には、川島町史(川島町 2006) 編纂事業の一環として調査された芝沼堤外遺跡(金

子 2004) のほか、首都圏中央連絡自動車道(以下圏央道)の建設に伴い調査された、白井沼遺跡(栗岡 2007)、元宿遺跡(鈴木 2009)、富田後遺跡、東野遺跡(宮井 2009)などが存在する。それらの調査の結果、縄文時代前期や中期、後期

の遺構や遺物が発見されたことから、時期的な偏りはあるが、自然堤防上には予想以上に遺跡が多いことが明らかとなった。一方、第2図に示したように、台地上には、縄文時代を通じて数多くの遺跡が形成されていることから、立地を異にして形成された遺跡がどのような関係にあったかを明らかにする必要がある。ここでは、前期から後期にかけて、台地と自然堤防という異なる立地に形成された遺跡の関係を探ってみよう。

芝沼堤外遺跡の調査では、諸磯b式後半からc式、十三菩提式古段階の土器が出土した。特筆すべきは、諸磯b式やc式土器が、住居跡や土壌に伴って出土した点である。芝沼堤外遺跡の約1.8km下流に位置する東野遺跡の調査では、十三菩提式古段階の住居跡8軒と、同時期と考えられる土壌や集石土壌などが合わせて49基発見された。遺構は周囲に広がることから、この時期の大規模な集落である可能性が高い。人間川河床からも諸磯b式から十三菩提式古段階の土器が発見されており、荒川低地の自然堤防上に、この時期の遺跡が数多く存在することは間違いないであろう。

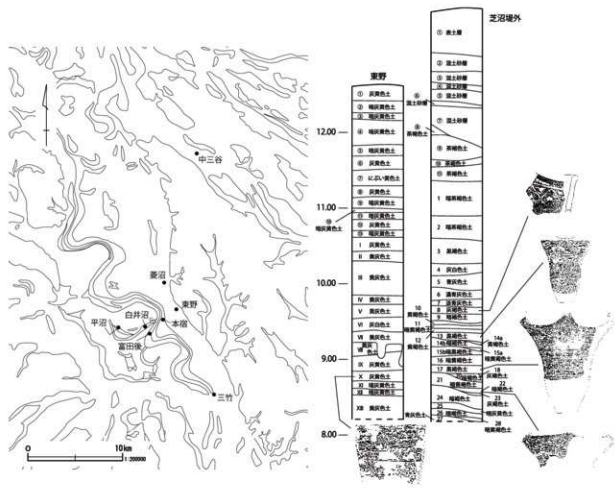
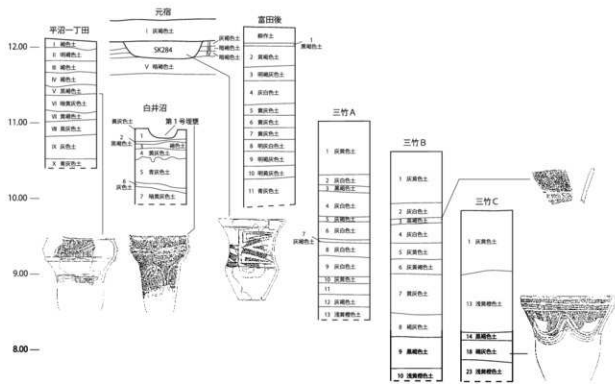
荒川低地の左岸側に広がる大宮台地では、上尾市堀口遺跡（小宮山 1994）や桶川市前原遺跡（宮井 2010）で諸磯a式からb式土器が出土したが、遺構は発見されなかった。上尾市在家遺跡（細田 1991）では諸磯c式の住居跡が発見され、包含層から十三菩提式土器も出土しているものの、一帯には遺構や遺物量も乏しい点で共通している。大宮台地や武蔵野台地では、海進時には海岸線に近い一帯で貝塚を伴う集落が形成されたが、台地奥部では既に集落形成は低調である。特に諸磯b式後半期以降は、台地上からは遺跡が激減する。芝沼堤外遺跡や東野遺跡の調査成果で興味深い点は、十三菩提式の新段階に荒川低地帯の自然堤防上に集落遺跡が形成され、その分布密度も高いと予想されることにある。

遺跡数の激減は十三菩提式新段階から勝坂式前

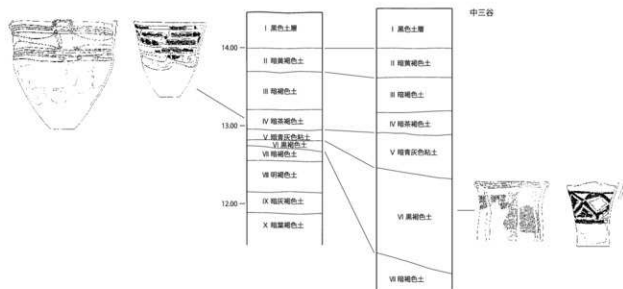
半期にかけても続いており、台地上はもとより、自然堤防上からも遺跡や遺物が発見されていない。その背景に縄文時代前期末頃の気候の冷却化が考えられているが、詳細は明らかではない。

勝坂式も後半期になると、桶川市高井遺跡（吉川、今井 2001）で住居が出現する。勝坂式の終わりころから加曾利EⅡ式にかけては住居数が増加し、環状集落を形成するようである。江川の谷を挟んで高井遺跡の対岸に存在する諏訪野遺跡は、環状道の建設に伴い調査され、大規模な中期の環状集落であることが明らかとなった。遺跡分布図には示していないが、上尾市秩父山遺跡（赤石 1989、小宮山 2004、2009）も大規模な中期の集落遺跡である。集落の規模が拡大するにつれて、周辺では遺跡数が減少する様相が窺え、中心的な集落に周辺の集落が吸収されるかのような状況が現れる。高井遺跡遺では、加曾利EⅢ式古段階以降は住居数が減少し、称名寺式期には集落が途絶するようである。これに反比例するように、周辺には桶川市前原遺跡や上尾市後山遺跡（小宮山 2009）等のように、加曾利EⅢ式からEⅣ式期の小規模な遺跡が増加しており、あたかも大規模集落の解体に呼応し、分散した小規模集団が新たな集落を形成していったかのようである。三竹遺跡では、加曾利EⅡ式からEⅢ式の資料が比較的多くまとっていたが、住居跡や土壌等が検出されなかったことから、集落が存在したと断定することはできない。台地状に形成された集落とは異なる機能を持った存在と仮定することもできようが、詳細は明らかにし得ない。しかし、台地上の遺跡と有機的な関係を保ちつつ利用されていたこと、台地上の遺跡の盛衰と対応関係にあったことは疑い得ないであろう。

中期に続き、三竹遺跡では堀之内Ⅰ式からⅡ式が、元宿遺跡からは、堀之内Ⅱ式から加曾利B式期の遺物出土しており、富田後遺跡でも堀之内Ⅱ式期の遺構が検出されている。しかし後期初頭



第49図 遺跡と出土層位 (1)



第50図 遺跡と出土層位（2）

頃の遺物は現在までのところ発見されていないことから、荒川低地一帯が一時的に利用し難い状況であった可能性がある。あるいはこの頃に新期自然堤防が形成されたのであろうか。

（2）遺跡の出土層位からみた流路の変遷（予察）

三竹遺跡は幅の狭い自然堤防上に位置しており、調査区内で東側に緩く傾斜している。発掘調査では、第2層上面で古墳時代後期の古墳跡や、奈良時代以降の掘立柱建物跡、溝跡などが検出された。第3層は黒褐色を呈する土壌で、本層から縄文時代後期の土器（第6図）が出土した。調査区の東側に当たるC-G-11グリッドでは、南北に走る第17号溝から、土師器や須恵器に混じって縄文土器が出土したことから、E-10-11グリッドでトレンチ調査を行った。その結果、第14、18層から中期後半の縄文土器が出土した。第14層は有機物を含む黒褐色土で、縄文時代中期の土器片が少量出土した。第18層は有機物を含む灰褐色土で、この層から連弧文系土器や磨り消し縄文の土器（第7図1、3）が出土した。このため、自然堤防の平坦面でも深掘りにより縄文時代包含層の確認を行ったところ、均一な堆積状況ではなく遺物も出土しなかったが、第18層に対比できる層が調査区

内に広がっていることが確認できた。A地点では第12層が、B地点では第16層が対比される層位と判断した。A地点の標高は9.5m、B地点が8.6m、C地点では第14層が8.3mであることから、自然堤防が東に傾斜していることが分かる。A、C地点では後期の土器が出土しなかったが、B地点では第3層から後期城之内I式土器が出土した。第3層以下は灰白色や灰黄色の粘性の強い土層が交互に堆積しており、遺物は全く出土していない。この堆積状況は基本的にA地点でも同様で、縄文中期以降に河川性の堆積物に覆われていたことを示している。

三竹遺跡の北側に存在する元宿遺跡では、標高約11.5m前後のV～VI層で加曾利EⅠ式土器が発見された。元宿遺跡に近い白井沼遺跡では、標高約11m前後の黄灰色土から加曾利EⅠ式の土壌や集石土壌が検出された。『川島町史』によれば、両遺跡が立地する自然堤防は、縄文中期中葉頃に形成された（以下中期自然堤防）と考えられている。三竹遺跡での現地表面の標高11mと中期の土器が出土した第18層の標高8.3m前後、元宿遺跡での現地表面の標高13mと中期出土層の標高約12m、平沼一丁目遺跡の現地表面の標高13mと中期

相当層の標高11.4mとを比較すると、南から北への現地表面と中期相当層との比高差が比例的な関係であることがわかる。このことから、三竹遺跡で検出された第14、18層は中期自然堤に相当し、新期自然堤防の形成により、埋没していたものと考えられる。

三竹遺跡の南西側にあたる入間川の河床からは、縄文時代前期前半の関山Ⅱ式から黒浜式、諸磯a～c式土器が発見されている。現在までのところ調査事例がないことから詳細は把握しかねるが、三竹遺跡よりもさらに古い自然堤防が埋没している可能性が高い。三竹遺跡では第18層以下は浅黄橙色や青灰色の粘質土で、前期の遺物や堆積層を検出することはできなかった。さらに深い位置に埋没しているか、あるいは近接した位置関係にあっても、自然堤防が形成されていなかった可能性も考えられる。芝沼堤外遺跡や東野遺跡をはじめ、現在の荒川河床からは諸磯式以前の遺物は発見されていないことから、現状では最も古い自然堤防が、現在の入間川沿いに存在した可能性も考えておくべきであろう。「川島町史」によれば、現在確認されるもっとも古い自然堤防を古期自然堤防とし、縄文時代前期頭に形成された可能性が考えられる。現在までの遺跡の調査成果や分布調査の成果からみると、古期自然堤防の形成にも時期差が存在したと考えられる。坂戸市木曾免遺跡(篠田 2008)では、台地斜面部で関山Ⅱ式土器が出土したが、現在の入間川河床遺跡と無関係ではないだろう。

三竹遺跡では、中期から後期の包含層に至る間に、1.4m程度の堆積土が認められた。富田後遺跡でも三竹遺跡ほどの厚さはないが、第5層の中期相当層から第2～3層の後期層の間に第4層の無遺物層が存在する。東野遺跡では中期相当層は検出できなかったが、前期包含層である第Ⅷ層から後期相当層である第Ⅷ層の間に無遺物層が存在する。三竹遺跡では第3層の後期包含層は第

2層古墳検出層の直下に存在する。富田後遺跡でも後期の第2～3層は古墳時代前期の直下に存在する。元宿遺跡では、後期の土壌検出面や土器が出土した層は、古墳時代の検出面とほぼ同一層であった。これらの事例からみると、縄文時代後期から古墳時代にかけては、河川の氾濫などの影響が少ないために、土壌の堆積が少ない状況が存在したと考えられる。堆積状況の比較をとしてみた諸事例は、利根川や荒川の影響を強く受けた環境が大きく変容していったことを示しているのではないだろうか。以下では、このことを裏付けるような示唆的な事例についてふれてみたい。

鴻巣市中三谷遺跡(富田、細田 1989)は元荒川の右岸に立地する遺跡で、現在は河川の堆積物によって平坦な地形となっている。発掘調査で旧石器時代、縄文時代中期から後期前葉、晩期そして奈良時代から中世にかけての遺構が発見された。調査区内では、縄文時代晩期以降は平坦な地形であったが、縄文時代中期から後期では、元荒川に向かって傾斜する谷地形を呈しており、縄文時代中期から後期の遺構は平坦面から斜面にかけて分布していたことが明らかとなった。縄文時代後期以前の遺構検出面は第Ⅷ層であり、斜面には第Ⅵ層とした遺物包含層が形成され、この層からも後期の住居が検出された。これらの遺構や包含層は第Ⅳ～Ⅴ層とした粘性の強い土層に覆われており、縄文時代晩期や奈良時代以降の生活面は第Ⅳ層で検出された。このように、第Ⅳ～Ⅴ層を挟んで地形が異なっていることが判明した。問題は、縄文時代後期前葉から晩期初頭に至る間に、どのような作用で地形が変わったかである。土壌分析によれば、第Ⅳ層は付近の第三紀層から河川などによって運ばれ堆積したものと判明した。出土遺物からみれば、第Ⅳ～Ⅴ層は、加曽利B式から安行3a式以前に堆積したものといえる。荒川低地帯の自然堤防上では、三竹遺跡や元宿遺跡のように、堀之内I式から加曽利B式にかけての遺構や遺物が

出土し、富田後遺跡でも堀之内Ⅱ式期の遺構が検出されていることから、中三谷遺跡で河川などが運んだ堆積物によって、遺構や包含層が埋没しつつある間、荒川低地帯では、逆に河川などの影響が少ない環境だった可能性が考えられる。このことから、縄文時代後期頃、利根川や荒川がその流れを徐々に変え、清水氏が指摘するように（清水 2011）、現在の元荒川や綾瀬川のあたりを流れていた可能性が高いのではないだろうか。出土

3. 古墳時代

今回の調査により、荒川低地帯において今まで空白であった古墳時代後期初頭に築造を開始する古式群集墳の実態が明らかにされた。さらに、古墳時代中期の円筒埴輪に特徴的な、外面2次調整にB種ヨコハケをもつ、窯窯焼成の円筒埴輪が調査区内から一定量出土したことから、付近に中期後半にさかのぼる埋没（消滅）古墳の存在が想定されるようになった意義は大きい。

(1) 古墳群の群構成

旧流路跡に沿って南北に延びる、幅約50mの馬の背状の自然堤防上に、二重に周溝を巡らした第1号古墳跡を中心とした、大きさの異なる5基の円墳が密集した状態で検出された。墳丘規模と埴輪との関係を見ると、①埴輪をもつ墳丘径10m以上の2基の円墳（第1・2号古墳跡）、②埴輪をもたない墳丘径7m台の2基の円墳（第3・4号古墳跡）、③埴輪をもたない墳丘径4mの小規模円墳（第5号古墳跡）に大きく区分される。群構成の特徴は、墳丘の大小と埴輪の有無によって階層秩序が明確に視覚化されていることが指摘できる。さらに、調査区の制約といった問題はあるものの、円筒埴輪や人物・馬などの形象埴輪を数多く出土した第1号古墳跡に対し、周溝の限定された範囲から、しかも覆土の最上層からのみ円筒埴輪の破片がまとまって出土した第2号古墳跡との間には、埴輪の出土状況やその内容に大きな隔た

れがある。おそらく、墳丘部の北東側に集中して形象埴輪を配置した第1号古墳跡は、古墳群の中でも中核的な存在の古墳であろう。また、小規模な第3・5号古墳跡は、第1号古墳跡と第2号古墳跡の隙間に割り込むような形で築造されていることから、第1・2号古墳跡との血縁的なつながりや従属的なあり方を読み取ることができる。同時に、近接した時間幅の中で築造された、ひとつのまとまりを構成しているようである。

りがある。おそらく、墳丘部の北東側に集中して形象埴輪を配置した第1号古墳跡は、古墳群の中でも中核的な存在の古墳であろう。また、小規模な第3・5号古墳跡は、第1号古墳跡と第2号古墳跡の隙間に割り込むような形で築造されていることから、第1・2号古墳跡との血縁的なつながりや従属的なあり方を読み取ることができる。同時に、近接した時間幅の中で築造された、ひとつのまとまりを構成しているようである。

(2) 二重周溝の性格

第1号古墳跡は、径約20m、幅約3mの周溝を巡らした内側に、幅1.2～2.4mの平坦面を隔てて、さらに同心円状に径約8m、幅約1mの小規模な周溝を二重に巡らす特徴的な周溝形態である。

既に墳丘部分が削平されていたため、この溝跡の性格については明確にし得なかったが、調査時の所見では、内側周溝の埋土の状況が後世の根切り溝などの攪乱によるものではなく、外側周溝の埋土の状況に近似し、かつ埋土中に埴輪片をまったく含まないことから、墳丘構築過程において黒褐色土を主体に埋め戻されたものと判断した。つまり、古墳の墳丘が完成した段階には、墳丘の下に埋没していたために埴輪の混入が見られなかったのである。ここでは内側周溝の掘削土を積み上げて、墳丘の核となる高さ数十cmの「小丘」を構築し、堅固な墳丘を築くことを目的とした土木工

法のひとつに位置づけておきたい(青木2003)。

こうした二重周溝をもつ類型は、東松山市下松5号墳、柏崎25号墳、熊谷市瀬戸山9・10号墳、群馬県西長岡横塚28号墳、世良田諏訪下11号墳などの竪穴系埋葬施設をもつ古式群集墳に集中して見られる。このうち帆立貝形古墳の下松5号墳では、内側周溝の底面に土師器鉢を逆位に埋設した状態で出土しており、墳丘構築過程における儀礼行為の存在が想定されている。

(3) 出土土器と築造時期

第1号古墳跡では、外側周溝の南西側と西側の2箇所から供献土器が出土した。前者は周溝の底面に3点の土師器環を配置し、周囲に破砕された須恵器甕の破片がバラ撒かれていた。一方、後者は周溝の底面に単独で土師器環が置かれていた。こうした土器使用のあり方の相違に、どのような儀礼行為が反映されているのか明確にはできないが、これらは葬送祭祀に使用され、被葬者に対して来世の飲食用のために、あるいは供物を捧げるための器として供えられたものであることはまちがいない。このように供膳用途の環を単独あるいは重ねた状態で周溝の底面に置くという土器配置は、古式群集墳の葬送祭祀において極めて典型的な土器使用のあり方である。そこには前代の方形周溝墓における壺・甕などの貯蔵具を主体とする土器祭祀とは質的な変化が認められ、古式群集墳の成立に連動するように葬送祭祀や他界観に大きな変化がもたらされたのであろう。

次に、第1号古墳跡から出土した土器群の特徴について見てみよう。須恵器甕(第13図5)は、短く外上方へ広がる口頸部を有し、口縁部にやや乱れた櫛描波状文、頸部には細かい櫛描波状文を密に巡らし、体部に櫛歯刺突文による文様帯をもつ。その形態的特徴から陶器窯跡群のTK23型式併行と考えられ、5世紀後葉から末葉に位置づけられる。伴した土師器環は、いわゆる比企型環(第13図1～3)である。口縁部が一度内湾し、

端部を小さく外反させるもので、腰高な器形は初現期の特徴である。また、単独で出土した土師器環(第13図4)は比企型環とは系譜の異なる、口縁部が短く内傾する坏身模倣環である。これらは銭塚遺跡編年のⅣ期古段階に位置づけられ、年代も須恵器の年代観に概ね一致している。

(4) 円筒埴輪の特徴

第1・2号古墳跡出土品および遺構外から出土したB種ヨコハケ埴輪を中心に、その特徴について整理する。

第1号古墳跡 2条突帯3段構成品が主体と考えられる。形態的特徴、内外面調整、胎土・焼成・色調等から大きくA～E類の5類に分類される。

A類:(第14図10・11・15) 口縁部は緩やかに外反する。外面調整は最上段にナメハケを施し、内面調整はタテハケ後、ナメハケを施す。突帯設定線は、工具による沈線を上端部側に描く。

B類:(第14図9・16・22) 口縁部はわずかに外反する。最上段の幅がやや長い。外面調整は最上段にナメハケを施し、内面調整もナメハケを施している。特徴的に中間段に小穿孔を穿つ。胎土・焼成・色調の特徴はA類に共通する。

C類:(第14図8・14) 口縁部は緩やかに外反する。比較的細身の形態で、各段の幅が等間隔に近い。A類に共通する突帯設定線が見られる。

D類:(第14図12、第15図17・18・20・25・30・34) 口縁部が鉤状に屈曲する。外面調整はタテハケ、内面調整はナメハケ後、指ナデをスリット状に施す。なお、内面調整のハケ工具の動きが右上がりになることから左利き工人の可能性が高い。器壁を薄く仕上げ、焼成は良好で須恵質を含む。胎土に大粒の赤色粒子の混入が目立つ。

E類:(第16図31・33・35・36・38) 器壁が厚く、突帯は突出度が大きい。胎土に大粒の砂粒を含み、器面には細かなヒビ割れが目立つ。

朝顔形埴輪:(第14図13) 胎土・焼成・色調の特徴はA類に共通する。特徴として1次口縁の

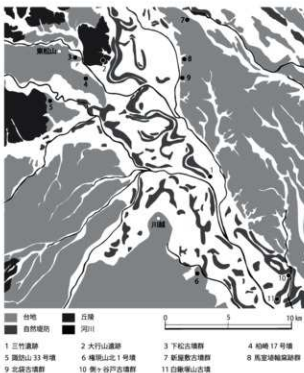
内面に、花状部との接合を強固にするための刻み目が見られる。また、肩部外面に3本線を斜めに入れたヘラ記号がある。

紙幅の都合で詳述は避けるが、各級の分類として、A・B類は鴻巣市新屋敷60号墳、D類は新屋敷43号墳、C類はさいたま市側ヶ谷戸2号墳、E類はふじみ野市権現山北1号墳を挙げておく。時期的には5世紀後葉から末葉を中心とした年代に位置づけておきたい。

第2号古墳跡 第1号古墳跡に比べ一回り大きく、3条4段の可能性もある(第20図1)。外面調整はナナメハケ、内面調整はヨコ・ナナメハケを施す。突帯は断面台形のしっかりしたもので、幅広の指ナデによる突帯設定線が見られる。また、突帯板押圧の痕跡が突帯の下側に残る。透孔は円形もしくは方形であろう。突帯の形状や胎土・焼成・色調が、第1号古墳跡E類に類似する。

B種ヨコハケ埴輪 B種ヨコハケ埴輪は第1号古墳跡と遺構外から合計6点が出土している。その内訳は、第1号古墳跡(第16図37)、第1号溝跡(第43図4)、第4号溝跡(第44図23)、第17号溝跡(第43図2・3)、試掘調査5トレンチ(第43図1)である。以下、その特徴を列記する。

①すべて窟窯焼成である。②外面調整は1次調整タテハケ後、2次調整B種ヨコハケを施す。一瀬分類(一瀬2009)のBc種ヨコハケが主体である。ただし、第43図4はBb種ヨコハケの可能性がある。静止痕間隔は5~7cm前後が最も多く、2.5~3.8cmと間隔の短いものや10cmを超える長いものがある。③第1段は1次調整タテハケのみで、B種ヨコハケを省略している。④突帯間隔の分かる破片はないが、9cm前後となろう。第1段高は15.5cm前後で、底径は16.0cmと19.6cmの2種がある。⑤口縁部は緩やかに外反する。外面には赤彩、ヘラ記号が見られる。口縁部高の分かる個体はない。復元口径24.8cm。⑥透孔は円形と考えられる。⑦内面調整は口縁部内面にナナメハケ、胴部から底



第51図 三竹遺跡周辺の古墳

部にかけて壁面に粗く凹凸のある指ナデを施す。⑧突帯は総じて高く、しっかりしている。⑨時期的には5世紀後半に位置づけられる。

この他に口縁部が直立し、器壁が厚く、外面調整に板ナデを施すもの(第43図6)や、幅広の突帯で突出度の高いもの(第44図13)は、中期的な要素を残しており、注目される。

(5) 埼玉県内のB種ヨコハケ埴輪

埼玉県における埴輪の受容は、中期初葉(4世紀末葉~5世紀初葉)の野焼き焼成で倒立技法による東松山市雷電山古墳の埴輪を嚆矢とする。その後、中期前葉(5世紀前半)には児玉地域で野焼き焼成、外面格子タキ調整をもつ特徴的な埴輪が、大型円墳の本庄市金嶺神社古墳、生野山将軍塚古墳、公卿塚古墳に樹立される。同時期には本庄市長沖157号墳や美里町志渡川古墳にも野焼き焼成で、外面2次調整にB種ヨコハケを施した埴輪が導入されるが、単発的な生産段階にとどまっていたと想定される。



1～4 三竹遺跡 5 北條古墳群 6 高塚埴輪集積群 7～10 関山33号墳 11～13 白銀塚山古墳

第52図 円筒埴輪集成図 (S=1/16)

中期中葉から後葉（5世紀中葉から後葉）には、野焼き焼成に変わって、竈窯で焼成された外面2次調整B種ヨコハケをもつ埴輪が、児玉地域では古式群集墳を構成する小円墳にまで急速に普及する。一方、比企地域では雷電山古墳以降、5世紀前半の空白期間において、5世紀後半になり竈窯焼成で外面2次調整Bc種ヨコハケをもつ円筒埴輪が、東松山市諏訪加3号墳や朽崎17号墳などの墳丘径20m台の円墳を中心に出現する。この他に埴輪棺に転用されたヨコハケをもつ朝顔形埴輪が見野大行山遺跡で出土している。また、荒川低地帯を挟んだ大宮台地西縁の北本市北袋古墳群ではBc種ヨコハケが、旧入間川流域のさいたま市白銀塚山古墳では精美なBb種ヨコハケの3条4段もしくは4条5段の円筒埴輪と朝顔形埴輪がまとめて出土した。さらに、鴻巣市馬室埴輪窯跡群では中間段にのみヨコハケを施す2条突帯3段構成の円筒埴輪が焼台上に用いられていた。三竹遺跡のB種ヨコハケ埴輪は第1段が高いのが特徴で、その系譜関係の解明が今後の課題である。

児玉地域のB種ヨコハケ埴輪の多くは、半円形

透孔の2条3段が主体で、口縁部外面に「×」や「入」字形のヘラ記号をもち、上野地域の強い影響が認められる。一方、比企地域周辺では円形透孔を主体に、突帯間隔が10cm前後に統一されており、古市・百舌鳥古墳群で完成されたB種ヨコハケ技法が直接的に伝播している可能性が高い。いずれにせよ5世紀後半段階には外面2次調整のBc種ヨコハケ技法と竈窯焼成技術といった二本柱の技術革新をテコに、古式群集墳を構成する小円墳にまで急速に埴輪祭祀が拡大・波及しはじめる。

(6) まとめ

大宮台地と武蔵野台地が最も接近した荒川低地帯の中に三竹遺跡は位置している。この低地帯には荒川本支流の合流点が集中し、まさに「水辺の十字路」と呼ぶに相応しい地理的景観である。既に初期須恵器の分布を通して、東京湾から荒川低地帯を遡上する河川交通によって、須恵器が運ばれてきたことが指摘されている。ちなみに荒川低地帯における初期須恵器を出土した主要遺跡を列挙してみると、伊興（足立区）～白銀・殿ノ前（さいたま市）～三竹（川島町）～城敷・下寺前・大西（東松山市）～下田町（旧大里町）～埼玉（行田市）と、東京湾と埼玉古墳群を結ぶルートが荒川低地帯を縫うようにのびていることが分かる。

埼玉古墳群は、関東平野の奥深くの内陸部にあるように見えるが、じつは荒川と利根川という、東京湾に注ぐ二つの大河川を結んだ内陸水路の要衝に位置している。埼玉古墳群を造営した勢力が、政治的・経済的な大動脈としての内陸水路の掌握を地域経営の基軸に据え、重要視していたことは想像に難くない。こうした文脈の中で古式群集墳の出現を理解することはできないだろうか。おそらく、三竹遺跡に古墳群を築いた集団は、河川交通の要衝をおさえることにより、埼玉古墳群の首長層と連携しながら、安定的な内陸水路の確保のために、河川の治水・灌漑を推し進め、荒川低地帯の開発に成功したのであろう。

4. 奈良時代以降

古墳跡を除く、他の全ての遺構が奈良時代以降に位置づけられた。具体的には、掘立柱建物跡2棟、溝跡19条、土城11基、ピット群1、ピット50基、近世の常滑埋戻1基である。

常滑の埋戻は19世紀のものであるが、他の多くの遺構については、具体的な時期の決定が困難であったため、奈良時代以降とした。

冒頭の遺跡の概要でも記したように、生活に関わる遺構は自然堤防上の微高地に、生産に関わる溝の大半は河川と並行した微高地側面や南北方向に検出された。この状況は、低地に存在する自然堤防周辺の遺跡ではごく通常の事であるといえる。

近年の調査で次第に明らかになってきたように、荒川周辺地域では、古墳時代前期に治水技術の進展により、河川周辺低地への進出が急激に進み、微高地が集落域として使われている。その後、古墳時代後期に墓域として古墳群が造営される事がしばしば認められ、平安時代に大規模な水田へと変わってゆくようである。

第17号溝から出土したおびただしい量の土器類も、9世紀に当該地域の水田開発に伴って行われた、何らかの投棄行為であると見ることができ、通常の投棄であれば、ある程度まとまった時期の遺物が特定の層位から検出されるが、第17号溝の場合には、縄文土器、石器、埴輪、古墳時代後期の土師器須恵器、8世紀代の土器類、9世紀代の土器類が、全てほぼ同じ層位から検出されている(図3参照)点に特徴がある。

この場合、最も新しい遺物である9世紀代の土器類が投棄時期を示し、それより古い時期の遺物は、何らかの形で収集・集積された後に、同時に投棄されたと考えらるべきである。つまり、9世紀代の投棄に関わった者が、自己の生活に関連した器材のみならず、縄文土器から8世紀代の土器類までも収集・集積して一括投棄したものである。

現在でも畑の耕作時に、鋧先にあたった小石な

どを畑の隅に集積する習慣があるように、当時の農耕具の強度とその価値を考えると、畑地での雑草の排除は日常的に行われていたであろう。

ここでは二つの点に着目してみたい。

一つは、8世紀代の須恵器と9世紀代の須恵器の残存率の差である。第17号溝跡の覆土から検出した須恵器の中で8世紀代の坏類に完形品は少なく、それに対して、9世紀代の須恵器には完形品が多い。つまり8世紀代の須恵器類は破損によって廃棄されたものが大半であり、それに対して9世紀代の須恵器の中には、未だ使用可能な完形品が少なからず含まれていると言うことである。

もう一つは、8世紀代の須恵器にも、9世紀代の須恵器にも墨書土器が認められる点である。この現象が意味することは、当該地点での投棄が、祭祀などによる墨書土器の第一時的な用途とは、直接結びつかないと言うことである。つまり、一括投棄された土器群の中で、8世紀代の墨書土器と9世紀代の墨書土器のあり方に具体的な差が見いだせない以上、墨書土器を用いた第一次的な祭祀の場所と考えることは困難であり、一括投棄と考えざるを得ない。

このような点から、ここでは、第17号溝跡に見られた、縄文土器、石器、埴輪、古墳時代から平安時代までの土師器、須恵器の、具体的な層位差を持たない検出状況について、最も新しい遺物群の年代、すなわち、9世紀に行われた一括投棄と考え、その原因として、大規模な水田開発に伴う移住とその際の廃棄行為を想定したい。

河川敷の低地は開発が少なく、遺跡の様相を知る機会がほとんど無いため、開発史を明らかにすることには大きな制約があり、開発とそれに伴う集落の動態については不明点が多いが、治水史という観点からも、現代の生活に関連した極めて重要な事項を含んでいるので、今後とも、このような機会を積極的に捉えて検討したい。

引用・参考文献

- 青木 敬 2003『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』六一書房
- 赤石光資 1987『秩父山遺跡―第2次調査―』上尾市文化財調査報告第29集 上尾市教育委員会
- 赤石光資 1989『小林遺跡』上尾市遺跡調査会報告書第1集
- 赤石光資ほか 1997『秩父山遺跡―第3次調査―』上尾市遺跡調査会報告書第9集
- 磯野治司 1995『水川神社北遺跡（第2次調査）市場1遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書第3集 北本市教育委員会
- 一瀬和夫 2009『古墳時代のシンボル（仁徳陵古墳）』新泉社
- 江原昌俊・大谷徹 2005『北武蔵における古墳時代中期群集墓の形成』『考古学ジャーナル』No.528
- 太田博之 2007『北武蔵における後期古墳の動向』『関東の後期古墳群』六一書房
- 川島町 2006『川島町史 資料編 地質・考古』
- 金子直行 2004『芝沼吳外遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書第2集 川島町教育委員会
- 栗岡 潤 2007『白井沼遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第328集 国土交通省関東地方整備局 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 熊谷市史考古専門部会 2011『荒川の流路と遺跡』『熊谷市史研究』第3号 熊谷市教育委員会
- 小宮山克己ほか 1994『堀口遺跡』上尾市遺跡調査会報告書第25集
- 小宮山克己 2004『秩父山遺跡―第4次調査―』上尾市遺跡調査会報告書第29集
- 小宮山克己 2009『秩父山遺跡（第5次調査） 後山遺跡（第6次調査）』上尾市文化財調査報告第91集 上尾市教育委員会
- 鎌田泰輔 2009『木曾免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集 国土交通省関東地方整備局 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 城倉正祥 2011『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』奈良文化財研究所 真陽社
- 鈴木孝之 2009『元宿遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第365集 国土交通省関東地方整備局 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫・細田 勝 1989『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 細田 勝 1991『在家』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第107集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮井英一・上野真由美・岡田勇介 2009『東野／平沼一丁田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第360集 国土交通省関東地方整備局 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮井英一 2010『前原／大沼』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第373集 国土交通省関東地方整備局 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 安岡路洋・土肥 孝 1974『後山遺跡』上尾市教育委員会
- 山田俊輔 2011『毛野の埴輪』『古墳時代の毛野の実像』雄山閣
- 古川國男・今井正文 2001『高井遺跡』桶川市教育委員会